

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



特 105

14

北海道廳事務官林龜藏先生序

渡島支廳  
管内

町村勢要覽

附衆議院議員選舉法











正 誤 表

頁	摘 要	誤	正
三	七行目「基を開く」の下	今の小字の	今の小字に
一一	鈴木農場の項「鈴木農場は」の下	七飯より	七飯驛より
一一	十一行目「宿野邊村に」の下	騰りて	騰りて
一六	二行目「彼岸に近くに及び」の下	蝦夷乱する	蝦夷乱射する
一七	沿革の概要「大字大野村」の下	意比神社	意富比神社
全	「大字一本木村は」の下	高賈	商賈
二九	十二行目「歸りて東は」の下	龜田は	龜田、
七五	四行目「千古の」下	木	大木
一九	瀑布の項「岩石迫れる」の下	字營呂	字常呂
一四	大字名稱の下	一ヶ所	一ヶ村
一六	沿革の概要「蓋し此頃より」の下	たらんか	ならんか
一八	志苔の館の行	臺地の	臺地に
二〇	三行目廣表の下	東北	東西

神子鏡









## ◎北海道龜田郡七飯村

位 置

渡島國龜田郡の北部に位し函館港を南に距る四里八丁  
北緯四十一度五十三分 東經百四十度四十二分

大字名稱

七飯村、大中山村、鶴野村、藤城村、峠下村、軍川村

地勢及廣袤

本村は横津岳の西北部に位し東は連山重疊して茅部郡白尻、鹿部の兩村に界し北は大沼を隔て、駒ヶ岳及境川を以て同郡森町に隣し西南は平坦なる耕地又は山脈相連りて龜田郡龜田、大野の兩村並に上磯郡上磯町に接す、東西五里三十三町、南北五里六町面積十四方里余あり

土 質

本村の東方の山地は安山石と稱する岩石多く大字軍川村方面は駒ヶ岳より噴出せる火山灰地土壤なり、又其一部は輕少砂土或は表面を被ふに黑色、褐色の墟土を以てせり故に肥瘠乾濕一様ならざれとも耕耘牧畜植樹に適せり

久根別川は源を大字峠下村字ムサワ峠より發し紆餘曲折して本村の西部を流れ横津岳及袴腰其他の山脈より發する小流を併せて上磯郡上磯町に至り有川と合して函館灣に注ぐ延長四里、本村唯一の灌漑用として水利頗る大なり

大 沼

大沼は本村の北部に位し函館を南に距ること七里、海を抜くこと四百余尺にあり東西約貳里余周廻十一里四丁、水面積三〇〇萬坪餘あり、沼の深さは十尋淺きは二三尋にして長井川、軍川、荊間川、堺川、古小沼川等皆之に注ぐ、然して沼の東端銚子口の一角より流出する折戸川は精進川、アメマス川を合して鹿部村に至りて海に入る函館水電株式會社は此水流を利用して別に水路を開き鹿部村の内に發電所を設けたり

湖中には無數の島嶼あり大小百十有二其大なるものは面積三萬坪小なるは一坪に満たざるものあり、嶼上点々草木繁茂し湖岸屈曲多くして大小數多の灣をなせり



魚族の重なるものは鯉、鮒、鱒、鱒、雨鱒、蝦等なり就中鯉、鮒は大沼に於ける最名ある産物にして明治四年時の開拓使支廳長時任爲基氏の移殖せしものなりと云ふ鮒は近年鮒に亞く産物となりしか明治四十二年七月十五日大沼公園、沼の家主八堀口龜吉氏か上磯村添山川より獲たる二鉢五合の蝦を移殖せしものにして現今はこの蝦のみにて年産額三千圓餘に達せり

蓴菜沼は大沼の西小沼山を隔て、稍高所にあり大沼を去る五丁東西に長く南北に短くして周圍凡貳里、湖水西北隅より流れて大沼に灌く名つけて界川と云ふ

### 一沿 革 の 大 要

本村は元七飯、大中山、鶴野、藤城、峠下、軍川の六ヶ村を以て一戸長役場を七飯村に置かれしか明治三十五年二級町村制施行の際合併して七飯村と改め當時の各村名を存して大字名となせり、本村の沿革に就ては舊記なく開村の年代を詳かにせざるも舊七重村は元和元年の頃字一本櫻木麓に地藏菩薩の堂宇あり住民之を信仰せりと寺院由緒書によりて當時既に和人の部落たりしを知るべしと雖も其の起原等に就ては何等文献の徴しへきものなし然れども本村は元松前藩領より函館奉行の配下に屬したることは口碑傳説によりて知るを得へし、後開拓使の支配となり明治五年開拓使七重勸業試験場を本村（舊七重村）に置き盛に内外農業の模範を示し開拓の事業を奨励せしか漸次縮少し後七重種畜場と改め専ら牛馬の蕃殖を奨めたりしも明治二十七年に至り廢止せり是より先明治二十一年龜田外三郡役所を本村に設置せられたるも明治三十二年に至り函館區に移轉せり、明治四十年四月一級町村制を施行せられ今日に及べり

大字七飯村は明治十二年元七重村、飯田村の二村を合併改稱せしものなりしか元七飯村は夷語「ヌアンナイ」と云ふ豊なる澤又は澤多しとの義なりと元飯田村は安政年間舊幕府八王「組同心（役人の名稱）數十戸を元七重村の北に當る土地に移住せしめ養蚕機業を奨励せり其頭取を飯田甚兵衛と稱し其姓を以て村名とせしもの、如く之れ飯田村の始なり

大字大中山村は明治十二年元大川村、中島村を合併せしものにして大川村の原稱不詳なるも安政年間既に住

民あり中島村は安政五年越後國より移住せる岩崎恒右衛門開拓の基を開き三ヶ年を経て住民三十戸となる當時函館奉行の役人開拓係中島辰三郎の姓を探り中島郷と稱せしを村名の始とす

大字鶴野村 鶴の巢せし所なりとの口碑あり安政年間相摸國大伴龜太郎なる人移住開墾せしと云ふ當時の戸數は十戸程にして点々人家の散在するに始まれり後同人は自己の持地を残れる者に分與して今を去る七十余年前退去せりと云ふ

大字藤城村 明治十二年元藤山村、城山村を合併せしものにして藤山村は原稱詳かならず往時陸奥國伊達善右衛門なる人此に來り開拓の基を開く今の小字の伊達の名あり、元城山村は長祿の役相原周防守政胤七重濱の戦に敗れて城山の壘を奪はれ茅部に逃れんと騎馬にて大沼湖を涉りしと云ふ城山は今の字城岱にして遙に巴港に臨みて平かなる所あるは蓋し是なるへし本村は安政年間越後國人坂田角藏頭取となり十五戸移住したるに始まれり

大字峠下村、夷語「ランボク」坂の下の義なりと開村の年代不明、陸奥國の人來りて開墾せしに始まれりと傳ふ天保年間に奥州南部より來住したるもの多く文久年間には四十戸、明治初年までは五十軒の村方と稱せらる

大字軍川村 往昔土人の居住せし地にして其酋長の名を「イクサンダ」と云ふに因み村名を付せしと云ふ。元茅部郡鹿部村の支村たりしか嘉永二年下總國林八郎兵衛なるもの移住開墾せしを始とし漸次南部津輕地方より來住し現今の部落となれり、慶應元年の頃舊相馬藩此地に開拓を企つるに當り鹿部の支村たりしを獨立村となす、但舊相馬藩の事業は三ヶ年間經營せしも明治元年三月之を廢したり

一氣象の調査を欠く

### 土地 及 戸 口 (大正十四年)

#### 大 字 別 戸 口



大字	種別	戸數	出生		死亡		計
			男	女	男	女	
七飯村		三九	一、〇五	二、〇五七	二〇〇	六九三	一、三三七
大中山村		三八	九八三	一、九四〇	三五五	八五九	一、〇一四
鶴野村		六	三〇四	二九	六〇二	一、三三五	一、八七三
藤城村		八五	二九二	三〇六	五九七	四、一三五	八、四〇六
大字	種別	計	計	計	計	計	計

出生死亡其他

配偶者數	出生		死亡		計
	男	女	男	女	
一、七〇〇	二〇〇	二二二	八七	八六	一七三
	男	女	男	女	計
	計	計	計	計	計
	婚姻	離婚	結婚	離婚	計
					二一

職業別

職業	數
官公吏	二八
教員	三一
社會社員	一九
農	九一〇
漁	二二
商	一三七
宿	一〇
運送	二六
精米	一〇
大工	一五
其他	一五九
合計	一、三七五

土地

土地	數
畑田	二、四七二
民有地	九九五反
村有地	四七二反
山林	一〇九二
牧場	八八〇反
民有地	九八四反
村有地	一、三五五
原野	一、三五五
宅地	六六八反
民有地	六六二反
村有地	五反
其他	二四〇反
合計	六四反

生産物

農産物	品目	數量	價格	品目	數量	價格
農	粳米	二、一八三	三七四、六三二	葱	七八、〇七〇	二七、三三五
	糯米	九九四	四一、九四七	葱頭	六九六	二〇九
	大麥	一八八	三、一五六	牛蒡	五三、八五六	六、四六三
	小麥	七〇	九〇三	南瓜	一〇八、二七五	一七、三三四
	燕麥	二、四二七	一三、二〇六	胡瓜	九二、七六	一五、七六四
	菜種	一四一	一、二九七	茄	九六、六〇〇	一四、四九〇
	大豆	三、九八四	七四、八九九	蕃茄	五、四九〇	七、一四
	小豆	一、〇五二	二二、二四九	其他蔬菜	三五八、九五六	五七、四三三
	豌豆	一八一	二、〇二八	牧草	一三三	三、三六五
	菜豆	二六七	七、四八	青苜蓿	四一、〇〇四	二、〇五〇
水産	鮭	五、〇〇〇	八、〇〇〇	苗木	五七八、〇〇〇	三、四六八
	鮒	四五〇	九〇〇	其他	四、〇〇〇	二、〇五〇
	魚	八、〇〇〇	八、〇〇〇	其他	四、〇〇〇	二、〇五〇
	鱈	二、五〇〇	八、五〇〇	其他	四、〇〇〇	二、〇五〇
	鮭	二、五〇〇	八、五〇〇	其他	四、〇〇〇	二、〇五〇
	魚	二、五〇〇	八、五〇〇	其他	四、〇〇〇	二、〇五〇
	魚	二、五〇〇	八、五〇〇	其他	四、〇〇〇	二、〇五〇
	魚	二、五〇〇	八、五〇〇	其他	四、〇〇〇	二、〇五〇
	魚	二、五〇〇	八、五〇〇	其他	四、〇〇〇	二、〇五〇
	魚	二、五〇〇	八、五〇〇	其他	四、〇〇〇	二、〇五〇
工業	澱粉	五、一三六	五、一四四	其他	四、〇〇〇	二、〇五〇
	澱粉	五、一三六	五、一四四	其他	四、〇〇〇	二、〇五〇
畜産	馬	三六	一五〇、一五	其他	四、〇〇〇	二、〇五〇
	牛	三三	八、二六〇	其他	四、〇〇〇	二、〇五〇
畜産	雞	六五、三〇〇	三、一、二六五	其他	四、〇〇〇	二、〇五〇
	鴨	四、五三三	五、四九六	其他	四、〇〇〇	二、〇五〇











政 計		負 担		納 税 成 績	
全 役 場 費	臨 時 費	調 定 額	一 戸 平 均	村 稅	地 方 稅
二、五三〇	四、四五〇	四五、六五五	三二、二〇	一八、七〇五	一一、〇三八
補助金	基金財產支補填金	納期後納入	納期後納入	未納額	收入歩合
三七五	七四七	一一、六二八	八、七五	九〇、七〇	七六、三九八
三九、四六二	四七三	二一、〇三八	七六、三九八	五四、五五	
通 計	一 戸 當				
一二、三三	八二、六〇				

官公衙及團體

官 公 衙	團 體
村 役 場	赤十字及
函館營林區七飯苗圃	愛國婦人會
郵 便 局	農 會
巡 査 駐 在 所	信用組合
	水産組合
	帝國在郷軍人會七飯分會

名 稱	員 數	資 産	經 費
赤十字社々員	六	正	一九三
愛國婦人會員	八	通	七五
七飯村農會	一、三〇〇	八六四	一、八八四
七飯村信用組合	三三六	一四、三九三	四〇七
大沼信用組合	一五三	三、八三九	六〇
大沼水産會	四二	一	三九八
帝國在郷軍人會七飯分會	二七〇		二〇八

相 馬 農 場

相馬農場は七飯驛を西に距る約十町七飯村字鳴川にあり、面積約二百三十町歩を有す本農場は元七重勸業試験場の所屬のものなりしか後石母田氏所有となりしものを大正六年相馬吉平氏之を買収して經營今日に至る現今は小作農三戸、場外小作人七戸あり事務所には主任塚本勇吉氏居住し農場全般の事業を支配せり、農耕適地約五十町歩鳴川は本場内を流れ清水にして飲料に適す

植樹事業、農耕地に適せざる部分に大正七年度より繼續事業として毎年落葉松八万本内杉五千本の割合を以て苗木は自作養成のものを植樹し來れり今後二三年にして終了すべく將來植樹成木して牛馬の放牧に差支なき程度に至れば牧畜をも經營すへしと

鈴 木 農 場

鈴木農場は七飯より約十五六町の東南字鳴川にあつて面積三百町歩を有す、本農場は元内山吉太氏の所有に



して牧場経営中のものなりしか大正元年頃鈴木商店の所有となるや小作人を募集して農場経営を爲せり當時  
應募者に對しては特に馬耕器械其他の農具及馬匹三十頭この價格約四万圓を貸付け大に開墾を奨励したる結  
果茫々たる野原は忽ち一變して見渡す限りみことなる畑地となれり、今や此農場より生産する主なる農産物  
は大豆「鶴の子」四千俵、馬鈴薯四千俵其他雜穀類約三千俵と算せらる、馬鈴薯の如きは其名を博し遠く内  
地府縣に移出せらるゝに至れり、現在小作農四十五戸著しく資力を増進せり其一斤當り作付反別は五町歩乃  
至十二町歩なりとす

特産地、葱、大正十三年より毎戸二反歩乃至三反歩の葱を栽培するに至る其成績優良にして聲價を擧げ市場  
に名を博するに至る

### 池田牧場

池田牧場は大沼驛を去る約二十町余大字軍川村字鬼柳大沼湖畔にあり池田醇氏の經營にして面積百十二町餘  
、又銚子口より東は茅部郡鹿部村西は同郡森町大字宿野邊村に騰りて千余町歩の放牧場を有せり、曾て青森  
縣地方より多くの牝牛を移入し肉牛の目的を以て之が蕃殖を圖りたることありしも明治四十年より漸次乳牛  
に變更し同年米國合衆國ニューヨーク州よりホル種牝牛一頭及び英領加奈多よりエーア種牝牛一頭を輸入し  
たることあり、現今に於ては純良なる乳牛を産するに至れり

## ◎ 名 所 舊 蹟

### 明治天皇の行幸

明治九年七月十七日 明治天皇陛下函館御巡幸の時開拓使七重勸業試験場（今の七飯村大字七飯村にして當  
時は七重村と稱す）に御巡幸同場事務所の上局に於て御晝餐を召させられ後同場飼養の馬匹及同場技手函館

大經の馬術を 天覽即日函館へ還幸あらせられたり

明治十四年九月北海道 御巡幸の時同月六日茅部郡森町行在所御發轅國道筋七飯村大字峠下村字葦菜沼宮崎  
重兵衛方 御小休所となり沼の佳景に面する八疊の間を以て玉座に充てさせられたり時に村民捕獲せる鯉鮒  
の潑漑たるものを 天覽に供し奉る同所 御發轅峠の上 御野立所は東北面快濶として駒ヶ岳の秀嶺天空に  
聳へ大沼小沼の奇景は一眸に收め得へき最も絶勝の地とす此山路は御車の牽馬に代るに峠下の村民數十名御  
車を牽奉る御用を勤めて峠下本村に在る開拓使設立の「ホテル」に 御安着 御晝餐を召させられ七重勸業  
試験場御小休馬匹 天覽函館へ 御着葦あらせられたり如此前後二回 聖駕を迎へ奉ることを得たるは本村  
民の感喜して止まざる所後世に至るまで記念すべきなり因に宮崎重兵衛氏宅 玉座の跡は今尚依然保存しあ  
り 葦菜沼湖畔に 明治天皇の御料に供し奉りし通稱冷水と稱する玲朧玉の如き靈泉あり滾々として湧出す

當時峠の上 御野立所たりし土地は個人有なるにより星霜を経るに隨ひ自然土地の變換を來し爲めに 御  
駐蹕の跡を煙滅に歸せしめんことを恐れ七飯村會は議決して之を村有財産として保存するの計を立て其の筋  
の許可を得て之を購買し其記念に松樹を植栽し後方は樹林として風致を添へ永く勝景の觀望を保たしめんこ  
との目的を以て大正二年五月十一日村長村會議員部長有志峠下學校職員等一舉して杉苗千五百本植栽したり  
即ち面積六反歩余とす

峠下「ホテル」は明治五年札幌國道開鑿の當時開拓使置應時代に設けられたるものにして其後建物は廢却  
し大野村へ拂下となれり同舊跡地は現在村有峠下小學校の敷地内に當れるを以て現場に之を標示しあり

元七重勸業試験場の建物は明治二十一年龜田外三郡役所及七飯警察署に使用したるも郡役所警察署廢止の  
後明治四十年八月函館大火函館警察署全焼に遇ふや七飯警察署たりし該建物全部移築せるを以て其跡地は特  
買を受けて七飯村有財産となし七重常小學校改築豫定地として存置せられたりしか愈々大正十五年度に於  
て此處に之か改築を見るに至れり、御駐蹕の跡地は小學校改築に先たち七飯本村有志の寄附により高さ十二  
尺の行幸記念碑を建設せり



### 東宮殿下行啓

今上天皇陛下未だ 東宮殿下にあらせられしとき明治四十四年八月本道 行啓同月二十一日函館區より大沼公園に 行啓 御野立所に於て御小休遊あらせらる 大沼行啓の時函館支廳長河毛三郎の言上により當初御豫定なきに抱はらす翌二十二日明治十四年 御巡幸の際に於ける葦葉沼 御小休所へ特に御使田内侍從武官を差遣せらるゝこととなり當日大沼停車場より小蒸汽船にて大沼より小沼に入り葦葉沼上陸地に着數町の山路を経て宮崎重兵衛宅に着かせられ當年 御小休の御場所庭園内老幹亭々緑々滴たる風光を賞せられたる後重兵衛夫婦及重なる親族に謁を許されて當年の状況を御下問され爾來一家無事なるは賀すべきなり又家業を努むべき旨を訓示されたるに宮崎氏 聖恩の辱なきに感激し奉答の言辞なかりしと

### 横津岳

横津岳は七飯村と龜田村との境に聳ゆる噴火山なり高さ三千八百尺渡島國第一の高山にして夏季尙ほ殘雪を戴く所あり龜田川之より發す其山嶺東西二峯併立して中央凹狀をなし遙に之を望めば灣形をなす故に鞍掛の名あり

登山

展望すれば一は内浦灣を眼下し一は巴港を俯瞰す北は大沼に臨む駒ヶ岳あり東北は烟波漂渺たる大平洋を望み西南には曠茫たる大野上磯の平野並に巴港の日光に輝き汽車の駛走する様恰も掌中にあるか如し、七飯青年團は七飯よりする登山道路開設計画中なり

### 駒ヶ岳

著名の噴火山にして其形状の奇抜なる世に奇山多しと雖も斯の如きは稀なり大沼公園はこの秀嶺の背景ありて一段の風光を加ふ

明治十二年八月獨逸皇孫殿下登山あらせられたり近年大沼公園の發展に伴ひ内外人の登山をなすもの年々

多きを加ふるに至れり

### 大沼公園

大沼公園は日本新三景の一として山水明媚天與の名勝地たることは茲に記述するの要なしと雖も北海道公園として開設せられたる沿革の概要を掲ぐるに左の如し

明治三十六年鐵道開通

明治三十七年秋、時の北海道廳參事官横山隆起始めて當所視察により北海道の大公園となすの画策により

全三十八年八月より地方費約壹千圓の經費を投して現停車場附近より道路開鑿に着手す

明治三十九年二月雇員三浦永太郎來り之を監督伐根取除に従事す

同年五月道廳は大沼を公園豫定地となし同園看守規程を定めらる、同年七月有志相謀り大山東郷兩大將の

銅像及忠魂碑を建立せり

明治四十年地方費五千圓の豫算を以て伐根取除其他經營を進む、同年大沼公園に仮停車場を設置せらる、

明治四十一年度より園の内部に對し着々事業の歩を進め爾來一ヶ年數千圓の經費を投し漸次公園の擴張に力めらる

明治四十四年大沼停車場の新築を見るに至れり

### 七飯村古戰場

七飯村大字藤城村宇城岱の山腹に相原周防守の城跡ありと今に石垣、井戸跡等ありて其古跡を存せり

長祿年間相原周防守政胤七重濱の戦に敗れ再び藤山(今の大字藤城村)の壘を奪はれ茅部に逃れんとして騎馬にて大沼湖を涉り駒ヶ岳に至りて鞍を乾かし馬に秣飼せしことありと

又永正十年六月蝦夷乱をなし大舉して松前城を攻む城將相原周防守季胤防戦力むと雖も及ばず逃れて大沼



湖畔に至る之れ其二姫を茅部の同族に托せんか爲なり、こゝに至りて蝦夷相繼を立て退ふこと益急なりければ季風進退維に谷り彼岸を眺むるに扁舟の漂ふあり喜んで馬を湖水に躍らし將に彼岸に近くに及び蝦夷乱すること驟雨の如き矢に馬先づ驚る季風鞍上に立ちて二姫を見れとも見へず恨を吞んで馬と共に湊み既にして二姫蝦夷に敵しへくもあらざれば石を結んで相擁して淵に沈む武田義廣季胤父子を救はんとして急騎追躡せしも遂に遅かりしと云ふ

温 泉

龜の湯 大沼セバットの北岸にあり弱鋼鐵泉に屬し醫治効用左の如し

留の湯 營養不良諸種の疾病の快復期、生殖器病神経痛等なりとす

熊の湯 七飯村大字峠下村字ムサワにあり東北方は森町に通ずる國道に沿ひ西南山脈をめぐらし深さ約四丈の谷底に湧出する冷泉なり本郷驛より一里半馬車の便あり

湯は硫黄の冷泉にしてリウマチス、脚氣、梅毒、皮膚病に特効あり

村會議員 木下清次郎 岩崎恒右衛門 坂本作太郎 西澤三郎 佐藤大助 田中松太郎 富原仁太郎

竹田伊三郎 三島友三郎 海藤一郎 大竹幸次郎 十倉綱記 金澤藤五郎 相馬富治 大瀧政吉

南條千代吉

部落部長 大久保芳藏 大瀧政吉 大畑石松 小澤久太郎 川口榮吉 一戸子之助

消防組頭 木下清次郎

有位帶動者 正七位勳六等清水洌 從七位勳六等迫田吉二 勳七等佐藤貞一 勳八等宇喜多秀夫  
軍籍に在る有位帶動者の調査を欠く

祝 刊 行

清 水 洌

函館市外七飯村へ水清々健康地  
トシテ特ニ別荘地トシテ紹介ス

七 飯 村







鐵道省囑托

# 柳澤脚氣病院

本院 (入院隨意)

函館本線七飯驛前  
電話七飯局 (二一一番)

院長出張所 (每日 午後三時ヨリ)

函館市若松町停留所前  
電話函館局二四〇九番

函館本線七飯驛前

## 口駒井農園

電話二六番

函館市旅籠町七十九番地

## 漁業 口駒井彌兵衛

電話三四六三番

龜田郡七飯村大字七飯村

蹄鐵工場 川村繁太郎

龜田郡大中山村

蹄鐵工場 川村 豊

龜田郡七飯村大字七飯村

牧畜 牛乳搾取 林 賢次郎



龜田郡七飯村大字大中山村

木材販賣業

土木建築請負

土地 賣買

### 池田合名會社

代表社員 池田榮吉

函館本線七飯驛前

土木請負  
七飯石  
一手販賣  
碑文彫刻



### 森本寅治

電話一四番

龜田郡七飯村大字七飯村

落葉松苗  
造林各苗  
果樹苗木  
農産種子

生産

販賣

園主

澤芳太郎

### 澤種苗園

電話二七番  
振替小樽五六九〇番

龜田郡七飯村大字七飯村

水車精米  
製粉米穀

商



### 菱沼常三郎

電略(ヒシヌマ)又(ヒシ)

### 菱沼養雞部

雞卵の御注文は多少に拘らず  
御願いたします

龜田郡七飯村大字七飯村

石材販賣業



### 小澤梅吉

電話九番



龜田郡七飯村大字七飯村

牛乳搾取營業

田中勝彦

龜田郡七飯村大字七飯村

牧畜業

平田與八

龜田郡七飯村大字七飯村

石材販賣

石工事請負

石材彫刻

泊出幸太郎

龜田郡七飯村大字七飯村

上川屋

米穀  
雜貨  
木炭

商太磯場初太郎商店

電話三二番

龜田郡七飯村大字七飯村

米雜穀賣買

吳服太物

雜貨荒物

木炭

今西山商店

電話(ニシヤマ)又(ニシ)

# 創立明治二十三年

本院所在地は土地高燥水清く風光明媚を以て名あり由來健康地と稱せらる

龜田郡七飯村

脚氣患者  
入院應需

## 村立七重病院

函館本線七飯驛より約十町本村にあり

電話八番



渡島國龜田郡七飯村大字大中山村

高等果物生産

有望葡萄苗養成

果樹蔬菜類

消毒最新實用噴霧器特約

販賣 **太渡島果樹園**

園主 山崎 太郎 治

振替口座小樽八六九三番

◎葡萄苗定價表へ御申込次第無代進呈ス

函館本線七飯驛前  
鐵道貨物取扱

**吉田運送店**

函館本線七飯驛前  
優良葡萄いづご  
其他果物花類

**丸谷農園**  
電話七飯局一六番

函館本線七飯驛前

電力精米  
米穀販賣

**や 淺利作之販**

函館市榮町百〇一番地  
米 穀 商 **丸谷商店**  
電話五九三番



龜田郡七飯村大字七飯村  
造林苗圃請負業

⊕ 木下清次郎

電話 一 二 番  
振替小樽 六八〇六番

大坂市北花區四貫島宮居町四貫島停留所南入

扇子齒ブラシ  
引札カレンダ  
諸雜貨類

Ⓚ 木下ナル木堂

振替小樽 三六一五番

和洋果實蔬菜  
葡萄苗木各種  
養成販賣

吉 松金果菜園

函館本線七飯驛下車十四丁  
電話 略 (マ) 又ハ (マツ)

龜田郡七飯村大字七飯村  
字鳴川四十八番地  
土木建築請負  
石材 販賣

Ⓛ 松野廣義

電話 四 番

農業  
牧畜業  
牛乳搾取

龜田郡七飯村大字鶴野村

⌘ 小田切善次



函館本線七飯驛前

旅館 **竹竹原** キヨ

電話二五番

1111

龜田郡七飯村大字七飯村

優良葡萄  
果實類

**徳** 遠藤義策

電話一七番

龜田郡七飯村大字七飯村

農業  
畜産業  
牛乳搾取

半田喜雄

龜田郡七飯村大字七飯村

木材 販賣  
土木建築請負

稻生小三郎

電話(イナヲ)又(イ)

龜田郡七飯村大字七飯村

牛豚生肉  
和洋酒類

販賣 平田與七

龜田郡七飯村大字大中山村

農具一式  
農産種子  
各種肥料

小西共同取次販賣所

龜田郡七飯村大字鶴野村

市戸子之助

1111



(一日新三景の一)

# 北海道大沼公園

大沼驛前  
鯉鮒御土産調進所

御待合  
**宮崎本店**

電話 八番

宮崎支店

御旅館  
御料理  
**湖月**

電話 一五番

支店へお越しの場合は遊覧船で(無料)御案内致します  
園内湖月橋畔は公園第一の絶景地であります  
各室内に定價表を掲出してありますから御安心の上御立寄下さい  
かしポイント、かし釣竿、貸間

函館本線七飯驛前

**入間川徳治**

電話 一八番

函館本線軍川驛前

村醫 **北原宇忠**

牧畜業  
牛馬商 **三小杉重次郎**

龜田郡七飯村大字峠下村  
字古峠十三番地

電略(コシキ)又(コ)

函館本線軍川驛前

蹄鐵工場 **山田千代吉**



龜田郡七飯村大字七飯村

山本信太郎

龜田郡七飯村大字七飯村

中村葡萄園

若中村若次郎

龜田郡七飯村大字七飯村

鈴木農場事務所

岡部重吉

龜田郡七飯村大字大中山村

字久根別向三百二十九番地

雜貨 荒物

石碑佛像請負

中村商店

龜田郡七飯村大字峠下村

木炭卸部  
吳服太物商  
雜貨日用品  
一五 中富喜三郎

電略(ナカトミ)又(ナカ)

# 賣藥業

龜田郡七飯村字鳴川

十五屋

堀良彦



村立七重病院前

旅館 小田切サト

電話 二八番  
函館市外大字七飯

函館本線軍川驛前

雜貨荒物  
木炭卸商

竹原商店

電話 一〇番

大沼驛前 (竹原支店)

御待合 竹乃家

貸ボート、自轉車

吳服太物  
雜貨荒物  
日用品

商 竹田榮一

龜田郡七飯村大字峠下

龜田郡七飯村大字大中山

村會議員 岩崎恒右衛門

龜田郡七飯村大字七飯村

菓子製造  
卸小賣

長工藤長吉

北海道廳  
免許

産婆 工藤チイノ

七飯村

函館本線軍川驛前

本 大關旅館

土木建築  
請負業

大關龜太郎

電話 五番

法雲寺

住職 五十嵐大法

龜田郡七飯村大字大中山村



龜田郡七飯村大字軍川村  
部落部長

牧畜業 小澤久太郎

龜田郡七飯村大字藤城村

獸醫 本宿家畜診療所  
蹄鐵工 本宿蹄鐵工場

龜田郡七飯村大字大中山村  
大工職

大工請負業 照井治郎吉

龜田郡七飯村大字大中山村

木材薪炭販賣  
土木建築請負 佐々木善藏

七飯村大字七飯村

大山重武

大沼公園

沼乃家

鹿大沼部  
間自動車發着所

電話五番

龜田郡七飯村大中山

味噌糍 製造業 矢林保文次郎

こめ、むぎ  
あは、ひい 質糍仕候







11111

函館本線七飯驛  
七飯村役場前

司法代書人

二水堂 代書人 小淺正男

電話 二九番

測量製圖

境界査定、土地分合筆  
地目變換、地價設定

◎北海道龜田郡大野村

位置 函館を南東に距る五里六丁  
北緯—— 東經——

大字名稱 大野村、本郷村、市渡村、千代田村、一本木村、文月村

地勢及廣袤 大野村は渡島國龜田郡の西北にあり、南西は上磯郡上磯村に界し西北は檜山郡に接し東北は

龜田郡七飯村に隣す、東西凡三里南北凡七里にして廣袤八方里七八三なり、地勢概して平野にして大野川

其中央を流れ上磯村に至りて海に注ぐ西北一帯の地は丘陵相接さ樹木蒼鬱なり

地質 大野川流域東南部は概ね沖積砂土にして西部觀音山の方面は下部粘土上部腐植土なり、宇萩

野、開發、目名、細入方面は泥炭地及粘土にして厚さ四尺に達し往々灰白色の火山灰を混す、大野川の兩

岸は概して地味肥沃にして漸次東北に進むに従ひ地味劣悪なり、大字文月村はヘキレッツ川に接するを以て

土質沖積砂土に屬するもの多し

大野川 水源を龜田郡大野村大字市渡村字小金井澤に發し南流して大野村中央を貫き迂餘曲折上磯村

に至り久根別川に合し函館灣に注ぐ此延長約十一里濶さ三十三間深さ六尺とす、此川は唯一の水田灌溉用

水にして之か利便を得ること頗る多大なり  
一、沿革の概要

本村には舊記なく開村の年代確實ならずと雖とも大字大野村意比神社の再建は享保十年九月にして大字市  
渡村、文月村も其頃の開村なるべく大字本郷村は文化元年相馬藩士白河仁右衛門大字千代田村は同二年米  
澤藩士島津才兵衛大字一本木村は高賈河内屋新左衛門の開發する所なり始め松前藩領なりしか享和三年函  
館奉行所の所轄となり大野村を元村とし他を寄村とせり其當時は村名にあらすして郷名なりき後復文政四  
年松前藩領に移され安政二年再び幕府の所領となる、明治二年八月渡島國龜田郡に編入され全五年九月開



拓使の管轄となり同十九年函館支廳所轄とす、明治三十三年七月町村制を實施さるゝや各村會して大野村となり従來の村名は大宇名となれり

大宇本郷村は相馬藩士白河仁右衛門なるもの文化元年移住し來り續て南部より關太郎竹次郎友吉文平相馬よりは藤兵衛來住せしか當時幕府は開墾獎勵の方針なりしかは文化二年金四百兩を貸付け一人五合つゝの扶持を與へて白河通に水田を開墾せり字白河通は其姓に因みたるものにして今の東側西側是なり仁右衛門病魔の侵す所となり再び起つこと能はざるを知るや所有地の全部を擧げて寺院に寄付すへきを遺言し文化四年四十七才にして死去せり今の大郷寺建設の地は即ち仁右衛門の邸宅なり其後能登より久右衛門、末吉南部より大右衛門來住して農業及駄送業を營み傍ら漁場稼きをなすもの等漸次増加し遂に現今の一部落を爲すに至れり

大宇市渡村開村の沿革は舊記なく口碑の傳ふる所によれば當村の最舊家は鈴木八三郎の祖先治郎兵衛は元佐渡より天野七右衛門の祖先七右衛門は越後より來り其他松本茂兵衛、吉川フタの祖先を開祖者と稱せり大宇千代田村は米澤藩士島津才兵衛の開墾にして文化元年本道に渡航し嶺下村より森村に至る官營道路開墾人夫取締となり其功勞により箱館會所より開墾の許可を受け文化二年開墾小屋を建て同三年南部八戸より農家十二戸を募集し來り字東前谷地に畑及田を墾成せしを以て開村の濫觴なりとす文化四年に川向トメキに水田三町五反歩を開き漸次既墾地の増成に伴ひ農家壹戸に付き一町三反歩つゝを分與せりと云ふ大宇一本木村は函館辨天町河内屋新左衛門の開墾にして文化三年五月箱館會所の許可を受け南部八戸より農家十戸を移住せしめ開墾に従事せり元治元年三月字千代田と共同し幕府在方役人より金百兩を借受け今の七飯村久根別川より一本木迄千八百七十一間の灌漑溝を開墾するの企圖をなしたり然るに工事容易ならず資金欠乏し中止するの止むなきに至り再び慶應二年幕府より金百四十九兩(十ヶ年賦)を借入れ漸く竣功を告げ疎水することを得るに至りて所々に水田開墾者が増加せり明治十六年開拓使より三百圓の補助を受けて大修繕を加へ一層疏通の便を計りたるもの即ち現今に於ける一本木の用水是なり

大宇文月村は南部高田村より與七と云ふもの移住せるを濫觴と云ふも年代詳かならず貞享二年水田を試作したるものあるも收穫なく廢止し續て現代野田作右衛門の祖先作右衛門南部野田村より來り元祿五年水田を耕し之れを試作すること三年にして廢止せりと云ふ爾來移住者は茅部郡石倉村附近に於て漁業に従事し又は駄送業の傍畑作をなしたるも松前藩主は同村住民に命じて水田を開かしむ俗に御上田と稱するもの之なり夫より漸次水稻を試作するもの増加せり

一、氣象の項を欠く  
土地及戸口

公私有地 (大正十三年)

- 宅地 八拾四町七反七畝九步
- 田 千七百貳拾七町六反七畝拾五步
- 畑 七百九拾八町四反貳拾八步
- 山林 二千貳百九十七町二反壹畝拾五步
- 原野 四拾貳町六反八畝八步
- 牧場 千八百八町五反五畝拾八步

戸數 千貳百貳拾六戸 (大正十三年)  
人口 七千四百二十九人 (十四年十月一日現在)

出			産			死			亡		
男			女			男			女		
嫡出子	庶子	私生子	計	嫡出子	庶子	私生子	計	男	女	計	
一四七	一〇	七	一六四	一四一	八	一〇	一五九	七四	五七	一三二	







備考

バター生産高二千二百五十斤  
牛乳生産高千五百五十石

價格貳千五百八十八圓  
價格壹万八千九百七十三圓

家	種別	飼養戸數	羽數	産		備考
				數量	價格	
禽	計			一六二、〇五三	九、二四四	二、三七二
工	種別	數	量	價	格	
産	計					
	木製品			六六〇		
	金製品			一、四二〇		
	計			二、〇八〇		
生産總額		一〇九七、七〇五圓	一戸當平均	八九五、三五錢		

教育

一、大野村在學兒童數 大正十四年三月三十一日未現在  
男 五四六人 女 五二八人 合計 千〇七十四人

一、學校數 尋常小學校 三、 尋常高等小學校 一、 分教場 一、

二、大野尋常高等小學校 (十一學級)  
尋常科 八學級、 高等科 三學級、

元大野小學校と稱し明治十一年二月十六日大野村九番地に創設當時の通學區域は大野本郷市渡文月の四ヶ村なりき

一、市渡尋常小學校 (五學級)  
明治十五年四月大字市渡村字本町に設立

一、島川尋常小學校 (三學級)  
明治十四年四月一本木に全十五年九月千代田村に分校設立したる分校を明治十八年十一月兩分校合併して島川小學校と稱し獨立す

一、萩野尋常小學校 (三學級)  
明治三十三年五月大野小學校分校として一時稻荷神社拜殿を充用し開校す  
明治三十四年四月獨立萩野尋常小學校と改稱す

一、大野小學校文月分教場 (單級)  
明治十三年六月文月村十二番地に創立

社寺

神	名稱	社格	祭神	所在	寺	名稱	宗派	所在
意富比	神社	郷社	大日靈貴命	大字大野村字西上町二十二番地	廣照寺	淨土宗	大字大野村字西下町四十一	
鹿島	神社	郷社	武甕槌神	大字本郷村字西側二十六ノ一				
稻荷	神社	村社	稻倉魂命	大字市渡村字本町五十六ノ一				
稻荷	神社	村社	稻倉魂命	大字文月村字上町七十一				
稻荷	神社	村社	稻倉魂命	大字一本木村字谷地三十				
稻荷	神社	村社	稻倉魂命	大字千代田村字東前谷地十六				











千代田同志會	公共心ノ養成風俗改良	千代田村字西川原
一本木義會	明治卅年組織風俗改良知識交換災害救助	一本木村
大野女子同窓會	明治四十三年設立親睦母校ノ援助	大野村西上町
大野教育會	教育ノ改善普及善行者表彰	大野村
大野村農會	明治三十三年設立	大野村
有限責任大野村信用組合	明治四十年二月一日設立	大野村

公 職 者

村會議員 一名欠員 梅津八藏 長谷川清 稻川廣光 吉田長次郎 岡村已之亟 澤村吉三郎 鍵谷万次郎  
 中村長八郎 土屋鋁三郎 田村惣三郎 中村市之助 西川佐平治 中村長作 前田長太郎 高田鐵三  
 部長 藤谷松四郎 中里長五郎 澤村吉三郎 高田孫作 吉田仁太郎 川村梅吉 長尾多七  
 消防組頭 鍵谷万次郎

龜田郡大野村新築  
 龜田郡大野村大字大野村

下國司法代書人事務所  
 下 國 季 義

安齊宗次  
 安齊鐵工場

龜田郡大野村大字大野村  
 米内留次郎

菓子製造卸商  
 薄 勉・強 屋  
 義 主 實 多 利  
 大 龜 堂  
 大野村字南野







本郷 間 江差

出發時間

本郷	江差
(午前七時半、九時半)	(午前七時半、午後二時半)

# コオウン自動車會社

營業所

本郷驛前  
電話江差局三七番

1103

果實生 造林種 苗木

落葉松杉獨乙唐檜其他

## 果樹苗木一般

本郷驛下車二十五丁

大野德川農場內

鈴木 木 果樹 苗圃

龜田郡大野村

函館每日新聞支局  
小樽、報知、時事新聞取次店  
種牡馬ベルシユロン洋種  
第八マロイ號種付場

獸醫師 植松俊三

大野村

1101

本郷驛前  
旅館 上田佐一郎

本郷江差間 自動車馬車 切符取次所







山林苗木各種養成輸出販賣所  
本道國道品  
原產地大野名産紅蕪採種所

龜田郡大野村大字千代田村字東前谷地

佐々木丑松

北海道渡島國龜田郡大野村

落葉松苗木

獨乙唐檜苗

杉苗

紅蕪種子

粒蕪

三船誠産園

龜田郡大野村

天佑堂醫院

村會議員 長谷川清

電話(ミフネ)又ハ(ミ)

番号小一〇三一〇番

定額表其他見積書第一等次第巻送附申上候

◎北海道龜田郡龜田村

位 置 函館港を南に接続し北緯四十一度四十七分、東經百四十度四十四分

大字名稱 龜田村、鍛冶村、神山村、桔梗村、赤川村、石川村

地勢及廣袤 本村は龜田郡の西南端にあり東は龜田郡湯川村西は上磯郡上磯町、西北は龜田郡七飯村南は

函館市と相接し北は渡島山脈により茅部郡と相背す、東西二里餘南北三里餘廣袤六方里六七七を有す

一、沿革の概要

本村は其龜田と稱するに至れる年代開發等の事歴詳ならず、寶徳年間河野加賀守政通館をウシキンに築く「ウシキン」は今の函館にして政通即ち龜田郷を支配すと、當時郷と稱せるは現函館市、湯川村の一部、現龜田村を含みたる廣大なる地域なりしもの、如し康正二年蝦夷蜂起し勢力甚だ猖獗にして其攻陷する所となり翌長祿元年に至り之を恢復す、後五十五年を経て蝦夷復蜂起し其攻むる所となり館主季通(政通ノ子)自盡す、而後久しく龜田の事史を徴すへきものなし、文祿二年松前慶廣肥前名古屋に至り豊臣秀吉に謁し秀吉より蝦夷全道を賜はり歸りて東は龜田は西は熊石を限り其以内數十里を和人の居住となし其他を蝦夷地となせり、俗に此地方を松前地又は「シャモ」と稱せり慶長以後松前氏主廳を福山に置き領土の全部を統轄し龜田、江差、熊石に番所を置き季行をして政務を司らしむ、政保元年龜田番所を函館に移し寛政十一年幕府蝦夷地警備のため松前氏に命し東蝦夷地を上らしめ之を直轄とす、享和二年箱館奉行を置く、寛文四年再び松前藩の管轄に復し、安政元年六月復ひ松前藩に命し箱館地方六、七里を上らしめ奉行の管理に屬せしむ、翌二年更に蝦夷地を収めて幕府の直轄となる、明治元年以來箱館裁判所、箱館府、開拓使出張所、函館縣廳、龜田郡役所等の廳官置廢せられ其の管轄となる、明治三十五年四月一日北海道二級町村制を施行し龜田、鍛冶、神山、桔梗、赤川、石川の六ヶ村を以て龜田村と稱し舊村名を大字として存せらる、大正八年四月一日一級町村制を施行し現今に至る











小種別	尋常高等	尋常	計	出席歩合
學校數	一	三	四	九一、三〇
學級數	二	一八	二〇	九七、四六

龜田尋常高等小學校 (國館師範學校附屬小學校)

本校には龜田女子實業補習學校を併置せり

鍛神尋常小學校 所在地大字龜田村字中通

赤川尋常小學校 大字赤川村字山下

桔梗尋常小學校 大字桔梗村字桔梗野

社 寺

社名	社格	祭神	所
比遲理神社	指定村社	神体は聖德太子の絹繪なりと云へり	大字桔梗村字桔梗野
三島神社	村社	大山祇命	大字赤川村字山下
稻荷神社	村社	稻倉魂命	大字鍛冶村字村中
赤沼大明神	大字赤川村の北方赤沼の邊にあり神体は蛇身なりと云ふ		

寺院名	宗派	所
寶皇寺	眞宗大谷派	大字桔梗村字桔梗野
大内寺	淨土宗	大字神山村字田子尻

衛生 交通 (本項ノ調査ヲ欠ク)

鐵道 函館本線は本村の西部を貫通し線路延長五哩にして停車場は五稜郭驛及桔梗驛の二ヶ所あり  
 上磯線は五稜郭より分岐して函館本線と連結し巴港に接続して交通の便備はれり  
 國道 三里十一丁六間、仮定縣道一里七丁、國道延長三十里二十九丁八間  
 郵便局 大字龜田村字瓦場下及大字桔梗村字桔梗野の二ヶ所にあり

財政及負擔 (大正十二年)

地	國稅	地稅	營業稅
稅目	稅額	稅額	稅額
地稅	六、六七〇	一八七	一、九二九
營業稅	八、七八七		三二七
計			
摘要			一戸當リ七圓十三錢



方 税		村 税	
所得稅附加稅	六八	村費總額	一斤當リ
地 租	四、八四一	村費賦課	一斤當リ
營業稅附加稅	七七	教育費(經常部)	一斤當リ
雜 種 稅	三、一八二	教育費兒童	一人當リ
戶 數 割	三、七六八		
反 別 割	三〇六		
計	一一、五六三		

官公衛及團體	
名 稱	員 數
小 學 校	五三 <sup>卅一</sup> 〇四
神 社	二八、〇一〇
寺 院	三五、六八一
官 修 墳 墓	四一、〇〇〇

官 公 署		官 公 衛 及 團 體	
(在現日末月二十年二十正大)		(在現日末月二十年二十正大)	
名 稱	員 數	名 稱	員 數
村 役 場	一	小 學 校	四
郵 便 局	二	神 社	三
鐵道省五稜郭工場	一	寺 院	四
巡 査 駐 在 所	三	官 修 墳 墓	一
停 車 場	二		

公 私 團 體		公 私 團 體	
(在現日末月二十年二十正大)		(在現日末月二十年二十正大)	
名 稱	員 數	名 稱	員 數
龜田村農會	一	龜田村聯合青年會	一
同 教 育 會	一	青 年 會	五
衛 生 組 合	一	婦 女 會	一
在 鄉 軍 人 分 會	一	處 女 會	三
消 防 組	一	信 用 組 合	一
自 警 會	二	畜 產 組 合	一

函 館 水 道

函館水道は明治二十一年人口六萬に給水する豫定にて工費二十四萬圓を以て起工、明治二十二年十二月竣工せり、水源は龜田川の上流赤川村にして函館市を去る三里地球引力を應用したる自然流下する不斷供給法にして同地より鐵管を以て引水す、同二十七年人口増加に伴ひ水量不足を來し更に二十三萬圓の公債により十五万人に供給すべく同二十九年九月起工同三十年竣功せり本村に於ける設計工事の主なるものを擧ぐれば  
 一、高區水源採入所 二、高區沈澱池 三、低區水源採入所 四、第一結合井 五、低區沈澱池 六、第二結合井 七、第三結合井  
 赤川水源流量、流量減少の季は例年二月なり然して明治四十四年二月中の平均流量は一秒時に就き二十立方呎八にして一日の流量は千百十九万六千〇五十七ガロンなりと云へり

園 田 牧 場

本場は龜田村大字桔梗村に在り函館市を南に距ること僅に二里國道に沿ひ函館本線桔梗停車場に接し總面



積五百七拾町七反二十三歩にして其地種目反別は水田拾四町八反一畝歩、畑地百六十五町九反一畝歩、宅地二町五反二畝歩、林地九十六町歩、放牧地二百九十町三反三畝二十三歩、私道路地一町一反三畝歩なり

本場は明治八年開拓使に於て今の七飯村に七重勸業試験場を置くに當り別に桔梗野に約百五十萬坪の地を相して附屬牧場を設け支那羊六百余頭を移し此處に飼養せり其後更に綿羊數百頭を輸入したるも何れも成績良好ならず之を廢止するの止むなきに至れり、而して後若干の牛馬を放牧して經營其の名を存するに過ぎざりしか明治十九年に至り官制の改革と經費節減の爲に之を經營し難きに至る茲に於て園田實徳氏獨力經營の案を具し貸下を申請し明治二十年三月許可を得て園田牧場と改稱せり、明治二十三年匈牙利、和蘭、英國より種牝馬、乳牛、豚を直接輸入し爾來設備の整頓と飼養の改善並に造林事業を計画せられ今や多くの優良なる牛馬を年々各地へ移出するに至れり

明治四十四年 今上天皇陛下東宮に御在まししとき 本道 行啓の際當場に御臺臨優秀牛馬の臺覽ありて場主に馬匹献納の榮を賜はりしと

### ◎ 名 所 舊 蹟

明治九年七月十七日御駐蹕の地

明治九年奥羽御巡幸の序を以て本道へ御巡幸遊され函館へ御上陸七飯村勸業試験場へ陸路御巡幸即日御歸函の際御野立遊されたる所なり

位 置 龜田村大字桔梗村字桔梗野百九十一番地村有地内にあり

明治十四年九月六日御駐蹕の地

明治十四年本道御巡幸の際森行在所より函館に御巡幸の際 御野立あらせられたる所なり

位 置 龜田村大字桔梗村字桔梗野二十一番地横山軒所有地内、國道に沿ひ並松木の高臺にして函館灣内其他津輕海峡を一時の下に展望し得べき地なり

保 存 土地所有者横山軒氏の特志に依り木柵を圍らし入口と思はるゝ所に明治四十四年 皇太子殿下本道行啓の際同氏に於て記念として水松二本植栽したり、大正十一年 皇太子殿下本道行啓の際其手入を爲せり

龜田村は大根と赤蕪の名産地

### 大 根 栽 培 の 沿 革

龜田郡龜田村に於ける大根栽培の濫觴は今より約百二十年前にして今の函館市大字龜田村田家の農民近江國の種子商上田善兵衛より白大長大根の種子を購入し試作せるに根身長大肉質豊軟にして頗る良好の成績を得たり爾來年々種子を善兵衛に仰き之を栽培し一本八文乃至十五文を以て函館町に販賣せり延て弘化二年の頃より龜田村大字龜田村字中道及大字鍛冶村に於ても之を栽培するものあるに至るや善兵衛は廣く練馬及宮重等の種子を各原産地に求め之か供給に應じ益々種子の販賣擴張に努む嘉永二年に至り大字神山村、赤川村に於ても多少作付するものあるに至りしか明治二十四年以降函館市の戸口増加に伴ひ需要頓に増加し今や龜田村に於ける特産品にして村内一般に之を栽培せざる農家なきに至れり明治三十三年七月農會設立せらるゝや種子共同購入を計畫し原産地に役員を派遣し調査をなす等之か斡旋に務め近來毎年二名の委員を種子原産地へ派遣購入し各農家に配付をなす爲め風土氣候に適合する種子を配付するにより優良品種の生産を見るに至り漸次聲價を市場に擧げ茲に大根名産地の名を得るに至り其生産物は函館市、小樽市、札幌市は勿論遠く網走に移出し本土は東京附近迄に移出するの盛況に達せり

### 赤 蕪 栽 培 の 沿 革

龜田郡龜田村に於ける赤蕪栽培の濫觴は大根と同様久しき以前より栽培せられたるものゝ如し初めて栽培し好結果を得たるは隣村大野村に始まりたるものゝ如し而して本村に栽培せらるゝ名産の赤蕪は肉質柔軟緻密



にして赤色鮮明なり生食用漬物用として珍重せられ千枚漬には最も適當なり種子は年々之を採收するも變質せざるは風土氣候の然らしむるところなるも一の特色と認むる所なり生産せし赤蕪は函館は勿論小樽、札幌地方へ供給せられ移出は本土各地に輸送せらる

四〇

### 有位帶動者及公職者

拓殖功勞者 守田 岩 雄

村會議員

池田音右衛門 船矢早吉 小笠原今朝松 筆村由松 水島玉太郎 小熊龜藏 木村徳太郎

鈴木寅吉 伊藤辨吉 工藤嘉兵衛 永田仙吉 守田岩雄 佐々木久松 川井藤吉 檜山勝次

横山龍夫

部落部長

第一部長 筆村由松

第二部長 石神定吉

第三部長 水島時太郎

第四部長 横田與平

第五部長 永田彌助

第六部長 藤谷榮吉

第七部長 山崎藤一

第八部長 佐藤幸吉

第九部長 鈴木千萬太郎

## ◎ 北海道龜田郡湯川村

位 置 函館港を西に距る一里三十丁

北緯四十一度四十三分 東經百四十度四十五分

大字名稱 下湯川村、上湯川村、龜尾村

地勢及廣袤

本村は下湯川村、上湯川村、龜尾村の三大字よりなり東は龜田郡尻岸内村に隣り北は茅部郡

尾札部、臼尻、鹿部の三村に接し南は龜田郡錢龜澤村西は龜田村、函館市に相對し西南の一部僅かに津輕

海峽に面し東北の兩面山岳連亘丘陵村内に起伏するを以て大字下湯川の外は交通概ね不便なり廣五里二十

一、丁表二里二十三丁面積十三方里なりとす

一、沿革の概要

下湯川村、本村往古の沿革は詳ならざるも今を去る約四百年の開發にして南部地方より農民濱道安兵衛漁

民小林權兵衛なるもの移住したるに始まり其後漸次移住者ありて幾多の變遷を経明治十三年三月初めて下

湯川村外二ヶ村戸長役場を置かれ同十八年温泉開發と共に人口頓に増加し明治三十一年十二月函館との間

に馬車鐵道開通し明治三十五年二級町村制實施となり越へて大正二年七月電氣鐵道布設せられ交通の便備

はりて層一層の殷賑を來せり、殊に最近に及びて温泉區域一帯は一市街をなし草生原野も別荘邸宅地と化

するあり大正十二年四月一級町村制を實施し今日に至る

上湯川村、下湯川村と同じく往古は南部地方より渡來者開拓の基をなし安政元年水戸の藩士庵原齋御手作

場を設け以來開墾に従事するもの増加し其他鑛山の發見により開發上一層の促進をなせり

龜尾村、大字龜尾村は錢龜澤に屬せしを明治十六年四月本村に編入せられたるものにして本村も亦安政元年

庵原齋幕府の命を帯びて産物會所を設置し農事を統轄し水田試作杉苗植栽拓殖上の模範を示せる爲め農

林の業翕然として起り漸次發達し以て現時の盛況に迫り



湯川温泉

函館を西に一里三十町下湯川村にあり發見年紀詳かならざるも今を去る二百六十七年前即ち承應三年松前家の嗣子千勝丸頼死の病氣に醫藥を盡せしも効なく遂に茲に湯治せられしに忽ち全癒したるを徳とし藥師堂を再建し黄金の藥師像を一軀及鰐口を寄付せらる現に湯倉神社に奉納しあり、爾來里人共同の湯槽を設け隨意入浴せるか如し又明治己巳の役榎本軍此の地を占領し傷病者の靜養所となす降りて明治十八年故石川藤助氏堀拔器を用ひ良好なる泉脈を得茲に初めて旅館を建て旅客を容る、設備をなす當時寂寥たる一寒村に過ぎざりしか明治三十一年馬車鐵道開通し大正二年是を電車に改め僅かに三十分間にして往來するの便を得てより遊客頗る増加し温泉附近は一市街を成し四時内外の遊客常に充滿し北海唯一の保養地たり

泉質と効能は湧出地により異なるも最近に係る試験成績によれば檢出成分左の如し

- 一、重碳酸石灰二〇〇九、九六八
  - 一、硫酸カルシウム九〇五、一四一
  - 一、クロールカルリウム三七〇、七五〇
  - 一、クロールナトリウム四、四七一、九九九
  - 一、硅酸五〇、四〇〇
  - 一、遊離炭酸二七五六、四〇
  - 一、消酸痕跡
  - 一、鐵極微量
  - 一、アリミニウム極微量
  - 一、硼酸不檢出
- 効能 胃痛、胃擴張症、胃酸過多症、慢性腸加答兒、膽石症、常習便否、慢性喉頭加答兒、慢性の肺炎及び肋膜炎、膀胱加答兒、腎臟結石、蚤白尿腎臟炎、痛腹、精尿病、ヒステリー、慢性リウマチス、遺精、精漏、攝護腺肥太症、腺病、糖尿症其他婦人生殖器症諸種の皮膚病に治効あり
- 溫度は低きは華氏百度高きは百二十度位の間にありて源泉數百餘あり、ラヂウム含有率は大正五年九月内務省衛生局の調査に據れば一リットル中の含量は約一三、二にして全國第五位と稱せらる實に東北及び北海道に於て第一位を占むる所以なり

氣象

氣溫	最高		最低		平均	晴	雨	曇	天	雨	日	雪
	度	月	日	度								
晴雨	二九	八月廿三日	一四	三月六日	八、六	一八六	一七九	二〇六				
霜	最降	最晚	霜初	最降	最晚	霜初	最積	最深	最深	最降	最降	最降
雪	五月二日	十月二十七日	四月十八日	十一月八日	七寸八分	一月十九日						

土地及戸數人口

一官公私有地を合計したるもの

地種目	反	別	地種目	反	別	地種目	反	別
畑田	二五六五	反	山林	一一、七六六	反	雜種地	七四	反
宅地	九九七九		牧場	二二七七		池沼	一三三	反
	四八四			一三五五			一、〇〇〇	反







教育

種別	戶數	種別	戶數	種別	戶數
炭燒屋	九四	運送業	六	湯屋	六
藝妓置	五	代書業	二	料理職	一
行商	二	洗濯業	一	精米職	一
料店	二	物品付業	三	大工職	三
宿理	六	商業	四	人力車業	一〇
理髮職業	六	飲食店	五	周旋業	一

商工業別

雜產		產	
雜	種別	入收業產	種別
冰	名物だんご	雞卵	チタ
一、二八〇箱	二〇、〇〇〇箱	九四、三三〇	一〇、二六九
三、三三四	六、〇〇〇	五、六五九	八、六三六
果實	紙	合計	牛乳
一九四、九五七箱	六〇七	六〇七	一五、二七六
三三、一八二	五七	三四、一六九	

禽雞家	畜			種別	牛	馬	豚	種別	薪木炭	林種
	十羽未満	十羽以上	五十羽以上							
一、二四	八	八	一	一	一	一	一	一	一	一
飼養	五八三	二二六	一〇	三四七	一三三	一三五	三	一	九、九六三	九、九六三
戶	二	二	一	一	四	四	一	一	一八四、四二〇	一八四、四二〇
數	一〇〇	一〇	一	一	一四二	一三五	七	一	八、七六六	八、七六六
計	一五九	七三	二	五〇	二六	二六	一	一	九	九
成家	九六六	二八	九	一九	一	一	一	一	二、四二二	二、四二二
禽	一、二九六	一〇	三〇	二	二六	二六	一	一	一九九、九三九	一九九、九三九
雞										
數										







宿泊者		大正十二年		大正十三年	
郵	種別	引	受配	達	電
便	普通	五三〇、五八〇	五九〇、五五一	五、二四三	着發信
信	書留價格表記	三、六〇〇	五、二四三	通話時數	計
計		五三四、一八〇	五九五、七九四	全通話時數	一、一八
諸	種類	量	種類	量	種類
車	乘合自動車	二	方	五	荷積馬車
	乘合馬車	四	自轉車	九	馬
					權
					量
					量

財政及負擔

入	歲	科目	金額	附記
使用料及手数料	六二〇	國庫交付金	五、五五	
國庫下渡金	二、〇一八	基本財産支消金	一、八〇〇	
雜收入	二、七九〇	寄付金	一〇	
前年度繰越金	四四四	村計	四、九〇八	村費一斤平均
地方費補助	六		五、一八三	五〇、六七六

歲出	經常	臨時	補助	合計
神社費	一五、二三三	土木費	一、八〇〇	六、二二九
役場費	七六九	衛生費	三、五二二	五、一八三
會議費	三、五〇四	實業補習學校費	九〇七	
教育費	一七、九四五	豫備費		四、九六二
警備費	三、三六	合計		二、三六三
勸業費	一〇	合計		一〇
諸稅及負擔	三、三六	合計		三、三六
雜支	一六一	合計		一六一
特別會計繰入金	八六三	合計		八六三
合計	四、九六二	合計		四、九六二

國稅及地方稅

國稅	地方稅	村稅
賦課額	一斤平均	賦課額
八、四四六	八、三六三	一斤平均
		賦課額
		一斤平均
		賦課額
		一斤平均
		賦課額
		一斤平均

官公衛及團體

官	公	衛
村役場	湯川森林事務所	湯川森林事務所分區員駐在所
村役場	湯川森林事務所	湯川森林事務所分區員駐在所
村役場	湯川森林事務所	湯川森林事務所分區員駐在所
村役場	湯川森林事務所	湯川森林事務所分區員駐在所
村役場	湯川森林事務所	湯川森林事務所分區員駐在所
村役場	湯川森林事務所	湯川森林事務所分區員駐在所
村役場	湯川森林事務所	湯川森林事務所分區員駐在所
村役場	湯川森林事務所	湯川森林事務所分區員駐在所







### ◎北海道茅部郡森町

位置

函館港を距る陸路十一里三十一丁四十三間  
室蘭港を距る海路二十四哩 北緯四十二度七、東經百四十度三六

本町は駒ヶ岳の西噴火灣の南一帯に地を占む西北は茂無部川を以て落部村と境し南一帯は渡島  
脊梁山脈を隔て、檜山郡に連り北は噴火灣に臨み山姿秀麗なるマツカリ岳を望む

大字名稱

森村、宿野邊村、尾白内村、鷺木村、蛭谷村、石倉村

地勢

南を東西に灣曲して走れる渡島脊梁山脈ありて土地東北に傾斜し山脈の東北にあたりて渡島富  
士の稱ある駒ヶ岳巍然として聳ゆ、西北部は丘巒近く海岸に迫り駒ヶ岳麓に近くに從ひて丘陵起伏すれと  
も沿岸は概ね平坦にして狭ふなる平野をなせり

駒ヶ岳は所謂膽振火山脈に屬する活火山にして高さ一一〇〇米噴火灣に面して直立す、曾て寛永十七年噴  
火し安政三年復た噴火せり形容甚だ雄麗なり

地質

一般に火山灰なれとも海濱の砂には多量の砂鐵を含み西北部には岩礁多く現はれ又諸川の流域  
には沖積土壌も少からず

廣袤

東西七里南北四里面積二〇・四〇二方里、海岸線四里十六丁拾一間

一、川及瀧 川流は比較的多く西南一帯は渡島脊梁山脈に東南は駒ヶ岳の裾を受け本町一圓此の噴火灣に面  
する傾斜面なるか故に川流は地勢に制せられて噴火灣に注ぐ

濁川 三里 源を天狗の山に發し落合に至りて清川と會し下濁川に至りて海に注ぐ

茂無部川 三里 落部村の村界を流れ本内茂無部の間に至りて海に入る

山野川 二里 源を桂岱の裏山より發し鐵道線より二百間許り山に入り一瀧あり高さ二丈五尺景色愛すへ  
し

桂川 一里 源を鳥居澤に發し坊主山より發する小流を合せ大瀧小瀧となり東流して蛭谷の浦に至り海  
に入る

地藏川 一里 トクサノツネより發しゴゴメ澤より發する種田川と共に本茅部に至りて海に注ぐ

大瀧 瀧 桂川の中流にありて高さ約六尺幅約五尺小瀧は其下流にあるも記するに足らず

鳥崎川 五里 森村と鷺木村との境を流れ上流に大なる瀧あり

森川 三里 森村の中央を流れて海に入る

屋白内川 四里 川中押部落の西を流る幅十四間余姫川御料林の溪間より發して海に注ぐ昔時は毎年秋に鮭  
の遡上せし川なりと云ふ

外に姫川中の川等の諸川ありと雖とも小流なり

一、港灣、深さ三尋乃至八尋

埠頭は木造にして突出すること百余間明治五年開拓使札幌函館間の新道を開設するに當り有名なる米人メ  
チヨロシ氏をして此工事を担任せしめたるに同氏初め本村を距る東二里半なる砂原村に築かんとせしか更  
に此の地を相して築造せりと云ふ

其後改築せられたる埠頭は丁字形にして長三十三間袖拾間ありて便益を得つゝあり

一、沿革の概要

本町大字森村は元砂原村の支郷なりしか茅部六ヶ場所と稱したる時内地人七戸來住せり、(氏名等不詳)  
後寛政十二年庚申五月に至り永住者十九戸、人口七十四人更に鷺木の支郷に屬し享和二辛戌年舊松前藩よ  
り舊幕領に引繼ぎ移民追々増加し安政五年に至り戸數五十七戸、人口三百五十四人に達し同年十二月中函  
館奉行所小出大和守より分村の許可を受け鷺木村より分離して森村と稱するに至れり

森村は元土人の小部落にして「オニウシ」と稱す(樹木の多く有る所の意なりと云ふ)往昔高森(今の字森)に土人居住せりと云ふも其  
戸數人口等不明なり、正徳年間舊松前藩私領の頃龜田郡小安村より茅部郡落部村支郷野田追一圓を函館在住の角屋吉右工門と云ふ人漁業



冥加金九百六拾圓を以て請負支配せり其頃入稼人七重、大野、戸切地（今の上磯村）龜田、市渡の各村より數多來り練引網業をなし收税は二八の割合を以て支配人に納む  
 漁業終了後は各入稼人退去し跡は番屋守其他は土人のみとなれるものなりしが天明二年中入稼人の中大崎松之助始めて移轉し後引續き移住者を見るに至れり

元治元年當時の取調による在住者左の如し

永住者	七十一戸	人口	三百九十人
出稼	三戸	全	十五人
寄留者	十九戸	全	二十三人
土人	十九戸	全	八十三人
合計	百二十二戸	全	五百一十一人

明治二年初めて和船を用ゐて森、室蘭間の航海を開く後村民吉田福藏なるもの帆前船を造り和船に代ゆ明治五年五月開拓使函館札幌間の新道路の開鑿に着手するに當り同年六月開拓使建築仮病院を森村に開く是今の森病院の濫觴なりと云ふ

明治六年十一月森函館間の新道路竣功と同時に埠頭八百五十尺の棧橋新築成りて室蘭航路を開始せらるゝに至り海陸船車の往復織るか如く大に股脈を極む

明治八年（月日不詳）官第十八區務所を置かれ村務を處理す全年三月二十日驛遞を改めて森郵便局を置かれ電信を開設し和歐文共に取扱ひたりしか後歐文電報を廢止す、明治十二年七月茅部山越郡役所を本村に設置すると同時に區務所を廢し明治二十一年三月三十一日茅部山越郡役所を改廢するに當り龜田外三郡役所と改稱し郡衙を龜田郡七飯村に移さる

▲是より先き郡役所を置かるゝや郡書記を以て本村並宿野邊及尾白内村の戸長事務を兼掌せしか茲に至つて郡書記の兼掌を解き森外二ヶ村戸長役場を置き三井勝用戸長を拜任す後明治二十二年鷺木外二ヶ村戸長役場區域を合し更に森外五ヶ村戸長役場となる

明治二十六年に至り青森室蘭間定期航路開通の結果森室蘭間航路廢止となる

明治三十五年四月一日北海道二級町村制を施行し舊五ヶ村を合して森村と改稱し佐野義正村長を命ぜらる

明治三十六年七月函館鐵道開通し宇柳原の一部に森驛を設置せられたりと雖も茲に至つて前年室蘭交通の利便を失ひたる本村は更に陸上交通機關の變化に遭遇し従つて村勢に一大變化を來たし一時衰兆を呈したりしか一面に於て住民覺醒の機をなし農業に牧畜に林業に商業に各改善を加へて奮勵し且つ鐵道開通以前に在ては殆んど無價値に等しかりし海産生魚は一躍盛價を以て本道及内地の市場に販出するに至れり茲に至りて村勢頓みに回復し明治四十年四月一級町村制を施行せられ前村長佐野義正（現今の森信用組合長佐野雨田氏）初期の村長として就職認可せらる

明治四十一年六月再び森室蘭間航路を開始し且つ郵便航路となりて遞信省の補給を受くるに至る、大正十年一月一日町制を實施せられ森町と改稱して今日に及ぶ

氣象

一、氣象本項の調査を欠く

土地及戸口

田畑 牧場 山林	私人	公有	合計	原野 宅地 雜種地 計	私人	公有	合計
	反	反	反		反	反	反
	三〇〇〇	一五五八	三〇〇〇		五八二六	三四八	六二六四
	四、七〇三	一	四、八五九〇		五九七	一〇	六〇七
	五三七六	一	五三七六		八一	一	八一
	五、〇九六一	八四九三	五、九四五四		一一、三〇二九	一、〇四〇九	一二、三四三八



戶口及出生死亡

五八

戶數	一、九九六	男	六、一四〇	女	五、九三八	計	一二、〇八八	出生	五九七	死亡	二七五
----	-------	---	-------	---	-------	---	--------	----	-----	----	-----

產 業

要 主	耕 地		反作	收 獲 高	價 格	主 業 兼 業	計
	作付地	不作付地					
米	二、三三九	四、五八六	一、五九〇	一、四〇一	五、三六〇	一、三三九	六、三〇〇
小麥	三、二四〇	九、四二九	一、四二一	一、四〇一	四、七六一	三、三三九	一、三三九
燕麥	四、二六〇	五、六六五	一、六六〇	一、四〇一	三、三三九	一、三三九	一、三三九
粟	一、九一五	九、九四四	一、二四一	一、四〇一	二、一五六	一、二四一	一、二四一
稗	二、八四〇	七、五三〇	一、八二四	一、四〇一	一、七九八	一、八二四	一、八二四
黍	三、八三〇	六、九六五	一、四一〇	一、四〇一	五、五九〇	一、三三九	一、三三九
蜀黍	四、七九〇	五、六六五	一、四一〇	一、四〇一	六、四六七	一、三三九	一、三三九
蕎麥	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、三三九	一、三三九
大豆	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、三三九	一、三三九
小豆	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、三三九	一、三三九
長豆	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、三三九	一、三三九
大福豆	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、三三九	一、三三九
金時豆	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、三三九	一、三三九
其他菜豆	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、三三九	一、三三九
其他豌豆	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、三三九	一、三三九
蕎麥	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、三三九	一、三三九
其他	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、三三九	一、三三九
計	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、三三九	一、三三九

主 漁	水 產 業 者		農 產 物		本 業	副 業	計
	養 殖	製 造	羅 甘 漬 茄 (茄) 甜 南 西 馬	籬 藍 菜 瓜 瓜 瓜 薯			
鮭 鱈 鯧 鯪	三、九六〇	六、一四〇	一、三三九	一、三三九	一、三三九	一、三三九	一、三三九
鮭	四、五八六	九、四二九	一、三三九	一、三三九	一、三三九	一、三三九	一、三三九
鯧	五、六六五	七、五三〇	一、三三九	一、三三九	一、三三九	一、三三九	一、三三九
鯪	六、九六五	九、九四四	一、三三九	一、三三九	一、三三九	一、三三九	一、三三九
計	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、三三九	一、三三九
鮭	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、三三九	一、三三九
鯧	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、三三九	一、三三九
鯪	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、三三九	一、三三九
計	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、三三九	一、三三九
其他	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、三三九	一、三三九
計	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、四〇一	一、三三九	一、三三九	一、三三九

五九







物産鑛		數	量	價	格	備	考
石材	其ノ他	1			一、六〇〇		

教 育

森尋常高等小學校 森村字上台二十五番地 明治十一年二月十七日設立開始

姫川特別教授場 森村字姫川 明治三十七年四月一日同

石谷尋常小學校 姥谷村八十番地

明治十三年中野富藏、中野西造、寺田長次郎、木村外藏、太田義明の諸氏相謀り部落有志者の寄付金を募り石倉村今の稻荷社附近に校舎を營み子弟を教育す之れ本校の始めにして石谷小學校と稱す明治二十九年四月一日公立石谷尋常小學校と改稱せり

尾白内尋常小學校 尾白内村字川中押二八七番地

本校は明治十三年一月の創立に屬し始め掛淵村と合同して尾白内村字川中押百番地を選び備に二十二坪の校舎を新築して之を白淵小學校と稱せり、其後入學児童増加し掛淵村より通學に不便を感ずるに至りたるとにより更に掛淵村との境界の地をトし明治十九年六月改築移轉す、其後本村は森村に掛淵村は砂原村に併合せらるゝに至りて砂原村は大字掛淵村の児童を本校に委託せり、明治四十一年三月尾白内尋常小學校と改稱し大正二年度に至りて委託教育満期となり大正四年度に於て改築して全年十一月二十九日現位置に移轉せり

石倉尋常小學校 石倉村字本石倉五六番地

當部落は元石谷小學校の通學區域なりしか明治二十五年六月本石倉五六番地に一家屋(今の巡查駐在所の在る所)を設けて石谷小學校石倉分校と稱し始めて當區域内の児童を教育すへき學校を創立せり現今の校舎は明治三十三年工成り獨立して石倉小學校と改稱す

桂岱特別教授場 石倉村字桂岱(石倉校を去る二里二丁)

明治三十六年の創立にして始め濁川校に屬せしか明治四十五年より石倉校に屬せり

尋常小學校教授場	尋高小學校	校數	學級數	在籍		科計	兒童		科計	教員數
				男	女		男	女		
六	一	七	三四	一三	六	二六	九七	八三	一、八六	三七

社 寺

一、郷社 稻荷神社 祭祀地 大字森村字上台三番地

由緒 正徳年間勸請享和元年社殿を新築明治九年十月郷社に列す

一、村社 稻守神社 祭祀地 大字鷺木村字四軒町百十九番地

由緒 享保元年六月勸請、文政十二年大破に付き再建せり明治九年十月村社に列す

一、無格社 稻守社 祭祀地 大字鷺木村字石川原三十八番地

由緒 明和元年五月勸請

一、無格社 稻守社 祭祀地 大字鷺木村字鳥崎十六番地

由緒 鷺木村菊地善五郎前三代の祖上磯郡の住人なりしとき本村へ入稼せしにより延享二年三月木の皮屋根丸木の柱を以て社殿を造りたるに明和二年焼失につき安永三年六月再建す爾後菊地稻荷と稱せり明治二十五年社殿大破につき新築落成す

一、無格社 稻守社 祭祀地 大字石倉村字本石倉四十四番地

由緒 寛政七年四月勸請

一、村社 稻守神社 祭祀地 大字姥谷村五十一番地

由緒 延享二年四月姥谷村平民木村辰之丞現在の地へ假社殿設立す其後文政三年六月社殿建立、破損の際は村民協力して再建せり明治九年鷺木村より分村し一村獨立せしにより明治十一年十二月出願許可を得て村社に列す

合併神社 稻荷神社、姥谷村宮の澤に鎮座の處明治十一年十二月本社に合併す

一、村社 稻守神社 祭祀地 大字石倉村字唐草恒五番地



由緒 寶曆七年十一月石倉村民及上磯郡漁業入稼者の志願に依り假に社殿設立寛政七年四月現在の地に再建、神官菊地家忠をして祭典式執行永続方法を定む明治十一年十二月出願許可を得て村社に列す

森町大字森村七十五番地

一、一 妙 寺 日蓮宗、實行寺末

由緒 函館富岡町日蓮宗實行寺住職志願に付森村に一字を創立致度旨安政十巳年出願同年七月函館奉行所の許可を受け一妙庵と稱す明治十二年十月四日地方廳へ出願法榮山一妙寺と改稱す

森町大字森村字森川二十六番地

一、祐 專 寺 眞宗、大谷派本願寺末

由緒 本村には本宗寺院なきに付き徒信協議の上海野市松所有地六百五十八坪を境内地に寄進し一寺創立の儀出願の處明治十七年六月二十五日許可を得

森町大字森村森川四十一番地

一、龍 光 寺 曹洞宗、高龍寺末

由緒 函館臺町百十三番地高龍寺住職十八世權中講義國下海雲志願に付出願の處明治七年四月八日許可同年八月二十八日一字を創立し高龍寺持龍泉院と稱せしか明治三十四年三月十四日一寺に引直し龍光寺と公稱の儀出願同年五月二十九日許可同年六月六日明細帳届出つ

一、境内堂宇

一字金毘羅堂本尊 金毘羅尊天

由緒 函館臺町高龍寺住職國下海雲志願に付き明治七年六月十日創立大正五年二月十四日日本堂庫裡共に焼失一時假堂を建立せしか大正十四年再建す

森町大字鷺木村字四軒町百十五番地

一、靈 鷺 庵 淨土宗、稱名寺末

由緒 文政三年三月廻國僧隆鈞錫を此地に歸め法義を説教し地藏尊を安置す現今の境内は當時の火葬場なり其後天保二年に至り村民の請願と稱名寺十五世住職靈舎の志願に依り一庵建立出願同年八月十五日函館奉行所の許可を得建立して稱名寺持靈鷺庵と稱す戊

申當時航走隊の上陸根據地に當り船下駁にて戦死せる農軍准士官山本泰次郎の墓石あり

森町大字鷺木村字四軒町百四十八番地

一、藥 師 堂

由緒 鷺木村字四軒町に温泉發見す同村人民等眼病其他の疾に罹り此の湯を汲取りて浴するに治せざるはなし、故に同村谷藤仁三郎志願に付き文政五年四月八日假に堂宇を設立す其後天保三年四月同村靈鷺庵持とす明治五年中堂宇破損に付明治六年四月再建

一、金光教茅部小教會所

森町大字森村字柳原六十六番地にあり

一、天理教敷島大教會北明支教會森宣教所

森町大字森村字上台四十五番地にあり

衛生交通 (本項の調査を欠く)

鐵道は兩樽幹線にして大沼驛より本村に入り赤井川、駒ヶ岳、姫川、森、石倉の各停車場あり又森室蘭間には遞信省補給の郵便航路ありて海陸の交通備はれり

鐵道及室蘭航路に關する統計 (大正十三年)

森港	森驛	各驛	乗客	降客	計	積荷	卸積	計
八、三六九	八六、六八八	四一、九二五	九、一七三	八二、七六七	一七、五四二	一	九五	四六、二〇〇
					一六九、四五五	二二、三五三	三三、八五八	四六、二〇〇
					八五、一八六	八、三〇七	四、三六三	一三、六七〇



財政及負擔

入		出	
歳入	歳出	歳入	歳出
使用料及手数料	三、四五二	臨時部	臨時部
國庫下渡金	五、〇五五	補教助費	補教助費
雑収入	八、二二三	衛生費	衛生費
前年度繰越金	一一、八五九	土育費	土育費
地方費補助	六五	教育費	教育費
交入金	六八五	會議費	會議費
寄附金	計	常部	常部
税金	五二、六一九	會場費	會場費
	八一、九五九	役議費	役議費
		神社費	神社費
		警察備費	警察備費
		勸業費	勸業費
		共同放牧場費	共同放牧場費
		共同薪炭備林費	共同薪炭備林費
		諸税及負擔	諸税及負擔
		統計	統計
		基本財産支消	基本財産支消
		補填費	補填費
		屠場費	屠場費
		合計	合計
		平均一戸當り	平均一戸當り
		賦課額	賦課額
		平均一戸當り	平均一戸當り
		平均一戸當り	平均一戸當り
		平均一戸當り	平均一戸當り

官公衛

名	稱	位	置
森町	役場	大字森村字上台	
森警	察署	大字森村字柳原	
函館區裁判所	森出張所	大字森村字柳原四七ノ乙	
帝室林野管理局	森分担區員出張所	大字森村字柳原	
森郵便	局	大字森村字柳原一〇〇	
森	郵便局	大字森村字柳原	
石倉	巡查駐在所	大字石倉村字本石倉	
石倉	郵便局	大字石倉村	
駒ヶ	郵便局	大字宿野邊村	
赤井	川驛	大字宿野邊村	

團體

一、有限責任森町信用組合 森町大字森村字柳原一六二ノ四  
 一、區域は大字森村外五大字を包括す  
 本組合は明治四十四年五月二十四日の設立にして前森村長佐野雨田氏（義正ヲ雨田ト改名）理事兼組合長たり當時村長在職中にありし同氏は深く本町の時勢に鑑み故瀨下要左衛門及び故吉田定助二氏と相謀り之を設立したるものにして逐年組合員並に出資口數を増加し大正二年末には人員百三十八人口數二六九に上りし



ことを傳聞したる本村高利貸の一味は將來由々敷大敵なりとし、双葉にして刃らすんば斧を用ゆるの時あるへしと茲に村長排斥團を組織し大に民心離叛の策を講し最巧妙を極めたりと云ふ此處に於て大勢已に非なるを看取したる佐野村長は退いて人心の轉換を計るは當さに公職者の踏むべき常道なりとし當時尙再選の余地ありしにも拘らず決然退任し一味の反對をも意とせず鋭意この組合事業に努力したる結果益業務發展して大に其成績を挙げ今日に至れり

事業發達概況表

種目	大正七年	大正十年	大正十三年	種目	大正七年	大正十年	大正十三年
組合員數	四三五	五〇三	五九八	借入金	七、二五〇	二七、〇五六	二九、九七三
出資口數	一、〇六一	二、二二〇	三、〇五四	貯金	七、八七三	二二、八四三	三九、二九七
拂込濟出資格	二八、三五六	六三、七七五	一五、七〇〇	準備金其他積立金	五、〇〇七	一一、一二七	三〇、九六八
預金	五、〇五〇	一〇、二〇六	二〇、四六五	剩餘金	三、四三八	七、〇九七	一〇、五八九
貸付金	四四、六二一	三二、三三八	一六三、七八四				

其組合成績優良なるを以て茲に之を表彰し金五拾圓を交付す  
 大正四年十一月十日  
 茅部郡森村 有限責任 森村信用組合  
 北海道廳長官正四位勳三等 俵 孫 一

多年組合の經營に盡瘁し事業の改善發達に資する處尠なからず其の功績顯著なるを以て特に之を賞す  
 大正七年八月十七日  
 北海道茅部郡森村 有限責任森村信用組合長 理事 佐野 雨田  
 産業組合中央會北海道支會長正四位勳三等 俵 孫 一

事業成績 銅牌

審査部長正四位勳三等農學博士 南 鷹 次 郎  
 審査總長從三位勳二等農學博士 佐 藤 昌 介

審査の成績に依り前記の褒賞を授與す  
 大正七年九月八日

開道五十年紀念北海道博覽會長  
 北海道廳長官正四位勳三等 俵 孫 一

事業成績 銅牌

北海道 有限責任 森町信用組合  
 從六位勳六等 竹 下 豐 次  
 正 六 位 大 野 祿 一 郎  
 正 五 位 渡 邊 鐵 藏  
 從五位勳五等 佐 藤 寬 次  
 從四位勳四等 有 働 良 夫  
 正 七 位 小 濱 八 彌  
 審査部長從三位勳二等 窪 田 靜 太郎  
 審査總長從二位勳一等 平 山 成 信

審査の成績に依り前記の褒賞を授與す

大正十一年七月十日 平和紀念東京博覽會總裁大勳位功二級 戴 仁 親 王  
 平和紀念東京博覽會長東京府知事從三位勳二等 佐 美 勝 夫



- 一、森尋常高等小學校同窓會 森村字上台二十五番地  
明治三十二年四月二十五日設立
- 一、森尋常高等小學校同窓會女子部 同上  
大正四年三月二十三日創立
- 一、青 年 團  
(イ)尾白内青年團 大正六年二月十一日創立
- (ロ)蛇谷青年團 大正六年青年會を現在の名稱に改む
- (ハ)本茅部青年團 同上
- 一、森 教 育 會 森町役場内にあり
- 一、蛇谷婦人會 明治四十一年創立
- 一、石倉婦人會 同上
- 一、石倉尙風會 明治二十八年二月二十八日創立  
大字森村
- 一、茅部山越水産組合
- 一、森 町 農 會
- 一、森町海産商同業者組合 本組合は大正十四年三月十八日北海道廳長官より組合規約の認可を受けたるものにして松居元太郎氏外三十七名の組織したるものなり
- 一、葛原 冷 藏 庫 葛原冷蔵株式會社の經營に係るものにして東京に本店を全國樞要の地に支店四ヶ所を設置せり

◎ 名 所 舊 蹟

(森郷土史抜萃)

- 一 駒ヶ嶽の風景 山嶽秀麗、蒼苔に迂り上りたり、線の崇高秀拔なる点に於て遙に神山、後方羊蹄山を凌駕せり四時朝夕その美的價値を發揮し自然の神秘を久遠に暗示す
- 一 森棧橋 自然の美を人工的たらしめしところに價値ありと認む、朝霞夕照を背景とし、本棧橋を舞臺効果あらしむるものは逍遙散策の麗人ならずして何ぞ春宵一刻は價千金とか、マサニ村民か公園ともいひつべし以て名所にかぞふる所以なり
- 一 鳥崎川 無技巧は技巧の極致なりとは鳥崎川を賞する適評ならんか、橋下橋上たゞわたる風の音にも自然の風韻あり石走る垂水の水に落ちこむ紅葉にも自ら藝術の至美を盡せり
- 一 本内の夕照 北の空にて夕焼けを紅に或は黄なるとき本内の鼻陸の色、海の色と映りて見ゆるさま巧なる油繪を見るか如し
- 一 鷺木臺場の趾 榎本釜次郎、大島圭介氏等上陸の際臺場を營みけん、然し今に其の遺蹟らしきを見ず
- 一 石倉の夜の汽車 下り列車今本石倉の大曲りを越えて石倉驛に向つて疾走するなり此の時車窓の明り波に碎けて映れる様名狀すべ可らず
- 一 明治四十三年八月北管局發行の北海道鐵道案内の石倉の景として載せたり
- 一 明治天皇御駐蹕の所 明治天皇御巡幸史に詳なり、山カ旅館の庭に「とのの松」などあり由々しき舊蹟なりとす

名 物

- (イ) 茅部栗 由来一帯栗を産す、わけて本内の高台は往昔栗の樹林にて近年まで約五十余萬坪の地、栗林なりき、當時は毎年數百俵を産出せり
- 當時の栗は味の点に於て他に勝れ本郡中産額の多きを以て知られたりしか遂に茅部栗の名を博するに至りしか其後開墾の爲め悉くこの樹林を伐採して一樹も残さざりしは惜むべし
- (ロ) 石倉の南瓜 婦人等皆曰く、内地の縮緬南瓜の種子を當地の畑地に植るときは一年目は内地同様のも



祝刊行

茅部郡森町

下國隆

の出来れとも二年目には土地化して遂に所謂石倉南瓜になるなり  
石倉南瓜は大き撰べるか如く揃へて形扁圓ヒダ著しく、しかも餘り深からず褐熟して白粉をふき見るから  
に甘そふなり年所詳ならずと雖も舊くより之を出して、この名を博したるか如し



# 祝 刊 行

# 下 國 隆

茅部郡森町

101

の出来れとも二在目にけし地化して産に所石倉...  
石倉南瓜は大き振べるか如く種へし形扁圓...  
に甘そふなり年所評ならずと雖も尙くより之を...  
名...たるか如し

114







函館本線森驛中の川  
海産物製造賣買輸出所

【新川】 電話六三番

松居リキ  
清水慶吉  
伊藤善吉

本宅 電話園三三番

養魚苗圃  
**松居元太郎**

【中の川】 電話一番ノ甲

松村元太郎  
松居元太郎

本場は駒ヶ岳の裾を去る數町水清く海陸の眺望最もよろしき所にして此の附返は將來別莊地として歡賞せらるゝに至らん

種禽種卵初生雞分讓

今期の成績

第三回北海道全道家禽共進會 壹等賞  
第十五回内國家禽共進會 五羽香特等賞二点  
三羽香以下壹等賞六點  
第八回日本家禽共進會 五羽香壹等賞金牌  
カタロク進呈



北海道茅部郡森港特等賞領受  
鶏雪園  
**安藤三郎**  
電話(ア)又(ンア)略電  
振替口座二七五七番

茅部郡森町棧橋通り角  
室蘭定期待合

松浦りの

きそば、うどん、御酒肴



森町

土木建築  
請負業

### 森 梅太郎

電話 一 二 九 番

北海道汽船株式會社  
三井物產株式會社  
三井物產株式會社

北海道賣炭所

石炭コークス取次販賣店  
セメント販賣

### 森 森梅太商店

電話 一 二 九 番  
北海道茅部郡森町

三ノ六

司法代書人

測量製圖及  
其他一般代書

### 菅谷公雄

北海道茅部郡森町柳原

北海道茅部郡森町(警察署向)

### 森 活版所

所主 平野富次郎

司法代書人

測量製圖  
特許實用新案  
出願書類作成

### 武 藤 秀

茅部郡森町

茅部郡森町

### 森 榮 座

座主 木村梅次郎

茅部郡森町遊廓通り

### 御料理 三 浦 軒

三 浦 康 吉

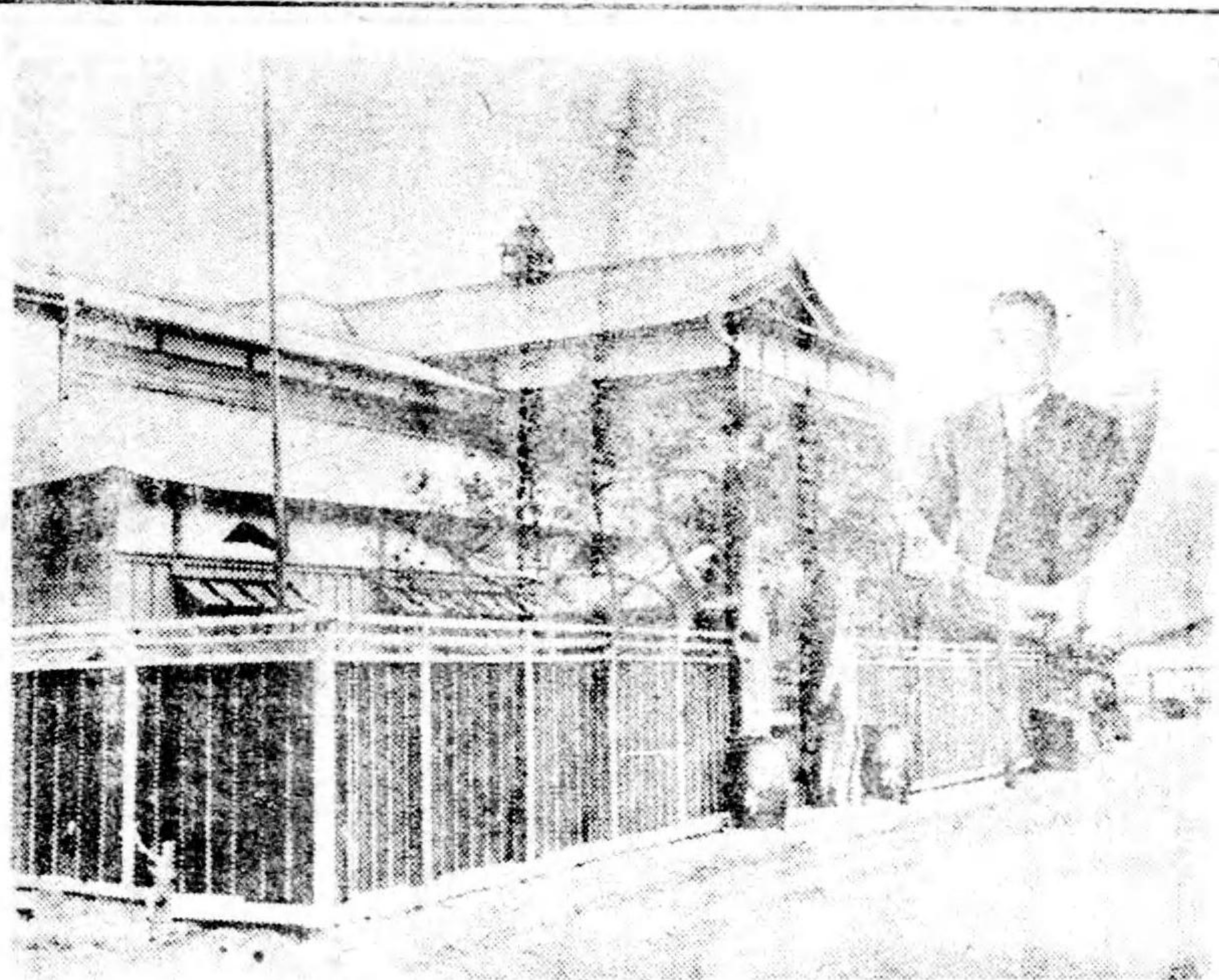
電話 一 一 八 番

茅部郡森町

### 仲立業 渡部宣得

三ノ七





茅部郡森町遊廓通  
いろは亭

御料理 本店 **川村利吉**

電話 四三番

森町中通り

御料理 第三支店 **喜福**

電話呼出 四三番

秋田縣南秋田大久保驛前

御料理 **第二いろは亭**

電話 三八番

北海道茅部郡森町

**武井金五郎**

駒ヶ嶽驛前

温泉駒の湯 **光明館**

嶽 驛より五丁余

諸病に特効あることは既に定評あり

北海道森町

和洋菓子製造  
砂糖 麥粉  
宇治 銘茶  
其他卸小賣  
商 **井**  
**小泉商店**

兒島米乳一手販賣

電話 一六番  
振替小樽 七七七番

茅部郡森町遊廓通  
森雇員獎勵會幹事

御料理 **さかた家**

輪島幸輔  
電話 七〇番

茅部郡森町遊廓通

御料理 **喜樂亭**

黑田與三郎  
電話 一二四番



海産物製造、物品販賣業

# △内野要太郎

電 略 (ウ)又ハ(ウチ)

北海道茅部郡鹿部村字本別三十三番地

## 森町會議員

高瀬寅治	村上關熾	川上錠次郎	吉田定助	清水平藏	北村駒次郎	高橋金次郎	谷榮助	酒谷慶助	松居元太郎
水口吉五郎	千歳常太郎	金丸忠三郎	西川留三郎	落合多喜造	堀井康三	新山由	山本朝吉	吉田久松	三澤伊三郎







大正十四年三月十八日 道長官認可

町 森  
海産同業者組合

組合長	松居元太郎	同	大野重太郎
副組長	酒谷豊太郎	相談役	湊吉平
同	吉田幸次郎	同	落合幸次郎
評議員	小川直藏	同	高瀬寅治
同	菊地治三郎	同	清水平藏
同	高橋林太郎	同	千歳常吉
同	蛭子忠雄	同	阿部捨吉
同	藤田寅吉	同	磯谷長藏
同	中西榮三郎		
同	菊地千太郎		

外組合員廿四名

◎北海道茅部郡落部村

茅部郡落部村は郡の北端に位し東西七里南北二里半の袋地状にして面積十二方里を有せり、東南は森町大字石倉村に境し近く雲を凌ぐ駒ヶ嶽の奇峰を仰ぎ海廣く水清く風景絶佳にして雄大の氣横溢す、西北は野田追川を以て山越郡八雲町大字山越内村に接し西南は山岳起伏連亘して檜山爾志兩郡に連り東北は内浦灣を距て遙に蝦夷富士の秀嶺を望み遠く室蘭灣頭と相對峙す、地域廣野渺しと雖も落部野田追茂無部川の三川流域及び海岸に沿ひ稍平地なり、地味概ね肥沃にして農耕に適し海岸は出入深からず港灣と稱すへきものなきも魚簇海藻に乏しからず

現在戸數五百十六戸人口三千五百十二、男女相半し農業に従事する者三百四十九戸水産業百五戸民有地五千九百九十四町歩公有地二百七十九町歩あり内二千二百六十五町歩は無租地なり、村有林造成は明治三十八年以來の繼續植樹にして字栗の木岱百六十五町歩並に黄金澤、厥野の村有地を以て之に充て落葉松八万五千五百本、杉四万七千五百八十本、ポプラ七千本、栗二千五百五十本あり、此坪數約二十三町歩なるが大正十四年度は椴松二千本落葉松三千本補植杉四千本を植樹の豫定にして植樹間の土地は之を小作人に貸付し現畑地五十町歩にして一ヶ年の小作料四百六十圓餘に上り尙耕地見込の沃地多く優に數十戸の入地者を收容し得べく檜山郡界に近き帝室林野管理局御料林は鬱蒼として繁り鋏斧を入れざる千古の美林に富むより木材の移出高年歳多額に上り此價格十五萬圓を算す、更に檜山郡厚澤部村字俄虫に通する拓殖道路竣工の曉は數倍の林産物を得、商工業の勃興期して俟つへきものあるより歴代の理事者は村有志と共に開墾を陳情し當局又之を諒として基本測量を終了し豫算上に際し經費多額を要するより審議の末財政緊縮の影響を受け豫備線に編入せられたるを遺憾とす

落部澤地には温泉多く湯の澤温泉は石倉驛と距る約二十町字湯の澤にあり溫度百度に近く、アルカリ性なり字下ノ湯に相木國太郎氏經營の下ノ湯温泉あり一名望路温泉と稱す停車場を距る一里強字望路にありて古よ



り知られ元東流寺附屬地なりしが其後中川直太郎の所有に屬し明治三十八年相木國太郎は温泉湧出地を除地したる關係上當事者權利を移轉せり、泉質アルカリ性鹽類泉にして清澄溫度九十七度の微温なり本泉は元山麓にあり常時高溫度なりしが暴風雨の際土砂崩壊して湯口を失ひ後發掘して湧泉を見るに至りしも地盤の變化により尙高溫を得難し寺院は温谷山東流寺と稱するは温泉湧出し冬季尙温暖にして積雪融解し温泉は東流して小川となり寺の傍を横ぎり海に注くより此寺名あり所以也、神經諸症、痲痺、瘡傷收斂解凝に効あり字犬主に笹田徳次郎氏經營のクヌリナイ温泉あり上ノ湯温泉と稱す落部驛を距る二里餘靈驗著るしきより巷間に知られ溫度百三十度あり、營業者自覺し設備の完全を期せは浴客踵を接すべく字犬主地方は悉く温泉地帯にして路傍鑛泉の湧出を隨所に認め得へし高熱のため常時湯氣上騰す本年六月以來龜田郡大野村川口福太郎氏は字犬主に鑛泉湯を開設すべく努力中なるが道廳衛生課の試験成績による醫治効能は腦神經衰弱、ヒステリ神經痛、癩麻質斯、貧血便秘、慢性胃腸病、氣管支炎、膀胱加答兒、婦人生殖器病、傳染性皮膚病、腎臟病、打撲、捻挫、骨折、脱臼の恢復後、腺病性體質、惡液質、病後の衰弱にして飲用適應症としては常習便秘、慢性胃腸加答兒、肥胖症、腺病性體質等にして一回の飲量三勺を適度とす檢体一リットルに於ける千分中に含有する固形物總量六、七九四二瓦にして主要成分量左の如く泉質クロール性硫酸泉に屬す

- クロールカリウム ○、四四〇九      クロールナトリウム    三、三八六四      硫酸ナトリウム    一、六二〇二  
 重炭酸ナトリウム    ○、五二二六      重炭酸カルチウム    ○、六二一六      重炭酸マグネシウム    ○、一五八一  
 重炭酸亞酸化鐵    ○、〇五三〇      無    水    珪    酸    ○、一〇九四      游離硫化水素    ○、〇〇三四  
 而して本泉は微蛋白石濁にして微に硫化水素臭と強鹹味を感じ弱酸性反應を呈す比重は攝氏十五度に於て一、〇〇五四なり

本村不朽の名所は御所の松にして舊土人部落會長亡辨開夙宅前にあり同氏は、今上陛下御成婚の際上京し小熊二頭を獻じたるに御所の松三十二本其他種々下賜せられ松は宅前に植樹したるものなり  
 落部市街より西方約二十町落部御料地に通ずる村道路傍字入澤に柵成木す、高サ十二間周圍二十尺あり樹齡

八百年余にして通稱柵ノ木と稱し詞を建立して龍神を祀る傍に山神の石碑あり本木を伐採せば奇禍立るに至り伐痕より出血すと傳ふ農家の雨乞、疫病除けは勿論心願あるものは詞前に額さ祈願を籠む蓋し本村の名木なりとす元本村は海濱に近く大木鬱蒼として枝を交ひ大熊出沒せしが明和二年の候より移住者踵を接し伐木の傍ら農耕に従事し漸次千古の木木を失ひ僅に字入澤に柵ノ木を止むるものにして開拓の當初を紀念追憶せんため保存したるもの也

翻つて本村の成立を調査するに今を距る百六十年前即ち明和元年の頃蝦夷此地に住居し土人語「ヲチシベ」と稱したりしが川汲外四十七ヶ村管領の松前藩士新井田嘉藤太源保壽は本村を所領し陸奥國下北郡佐井村より相木仁右衛門外二戸を移し漁業を營ましめたるより和人の來り住する者増加し漸く村落をなすに至れり、明和二年字落部に應神天皇を祭神として一社を建立したるが現村社八幡社の起元なりとす新井田家は新田の支族にして世々土持甲斐守と稱し安東下國家に隸したり武田信廣創業の後松前藩士に列せり、天明四年村上八右衛門稻倉魂命を勸請して一社を建立す今の稻荷社即ち之なり寛政三年五月野田追濱に惠比須社を建立し文化六年五月茂無部濱に宮古嘉兵衛は八重事代主命を祭神として社殿を建立したり現無格社惠比須神社是なり、文化元年加賀の僧知照は大谷派本願寺末道場を字落部に創立したるが今の大谷派東流寺の濫觴にして文化二年函館本願寺掛所末となり東流寺と改め明治十一年十月大谷派本願寺直末に復し温谷山東流寺と稱す、文化四年三月松前藩地を離れ幕府の直轄に飯し文政四年三月再び松前藩の所領に復し函館奉行所所轄となるに及び落部を本村に野田追及茂無部を支郷として一村を形成す、全年十一月村役人を置き相木仁右衛門を百姓代に採用し代々其任に就き落部を陣屋とす安政二年に至り、越前地方より來住するもの多く文久二年の候百戸に及ぶ明治二年八月蝦夷地を改めて北海道と稱し十一ヶ國八十六郡を置かる、や渡島國茅部郡に屬し開拓使の所轄となり字落部に遷卒を置く、其後徳島縣人の移住するものあり明治七年三月開成私塾を東流寺内に開設す之れ本村教育の矯矢にして全年相木堯太郎第十八大區劃副戸長に任命せらる、明治九年落部驛遞局を置かれ十二年一月字落部濱通に戸長役場を設置し龜田外三郡役所の所轄となり七飯警察署落部分署を置か



る、全年二月五日校舎を新築し落部學校と命名現落部尋常高校の鼻祖とす、明治十二年十二月驛遞局廢止と共に郵便局設置郵便事務を開始し宮川大吉局長となる更に明治二十九年七月爲替貯金事務を執り相木國太郎局長に任命せられ明治三十三年二月小包郵便を又明治四十一年十一月電信事務を開始し通信機關完備して今日に至る、明治十六年二月野田追分分校を設置し十七年十月落部學校校舎改築移轉せり、爾來移住者増加し明治十九年三月森分署巡查駐在所を新築し二十七年現在の場所に移轉す、二十六七年の候愛知縣より多數の農民移住し岩手青森之に次ぎ荆棘を拓き農業に従事せり、二十八年戸長役場を移轉新築す現在の村會議場之なり明治四十年十月更に役場新築工事成り大正十三年改造大修築を加へ執務に使せり、二十八年一月一日御料局函館出張所落部分担區の新設あり明治三十一年九月豫て野田追分に建設ありし淨土宗説教所を徳川山建長寺と寺號公稱を允許せらる同年野田追尋常小學校を新築す三十五年七月字物岱に天理教孝部宣教所の新設あり宗教觀念大に振興す、三十六年函館支廳の所轄となり四月一日藏野教育所を開校したるが同年御料局に於て字望路より落部御料地に至る一里半並に三十八年字藏野より野田追御料地に至る一里間の道路を開鑿し漸く馬の交通に支障なからしめ併せて落部、二股、野田追、逆川の各御料地に農業地三百餘町歩を區劃し移住民の招來に努めたり三十八年落部小學校を現校舎敷地に改築し四十二年四月一日白瀧、茂無部の二特別教授場を開設す、全年八月停車場設置を請願し四十四年八月五日字中野に落部驛設置を見開通式を舉行す茲に於てか運輸交通の便頓に加はり村勢一變の狀を呈せり、大正三年四月上ノ湯特別教授場を開設し同年十月殖民道路として請願中の望路犬主間約一里國費を以て開鑿せられ大正二年凶作に因る窮民救濟事業として村債を起し落部望路間千五百間を開鑿連接し以て車馬を通すること二里餘に及びり而して大正十年に至り字犬主落部御料間約一里の路程は國費及び帝室林野御料局の補助により開鑿したるが本道路は渡島背腹を横斷する路線の一部にして經費緊縮の影響を受け檜山郡に通する拓殖道路は豫備線に編入せられ連絡するに至らず郡界に近き森林地帯は地味肥沃にして農耕に適する所多く雲に聳ゆる大木は晝尙暗く無限の寶庫を藏し開通否や實に本村の向上發展上死活問題に屬せり

其後戸口増加と共に村勢頓に向上し大正四年四月一日二級町村制を實施せられ落部村役場を開廳し岩間勝從氏村長となり六月初めて村會議員定數八名を選舉せり此年逆川御料地及二股の學齡兒童を森町桂岱教授場に委託教授を開始せり、翌五年九月佐々木菊松氏村長を命せられ六年四月教員規定改正の結果藏野教育所は藏野尋常小學校と改稱し、五月人口増殖に伴ひ村會議員定數十名となる同年四月より野田追御料學齡兒童を八雲町野田生原教授場に委託教授し、八月村民の醜金により戦死者の忠魂碑を建設し除幕式及び第一回祭典を舉行せり、十月落部小學校に一教室を増築し、九月氏子総代三宮萬平等卒先唱導し落部百九十七番地に村社八幡社を奉遷改築の工を起し十一月十六日竣工せしより神社崇嚴の氣を増し住民の土着心を湧起せり、大正七年一月落部村信用組合組織成るに及び産業資金圓滑となる、大正十年九月佐藤藤太郎村長となり翌十一年一月菅原直治郎氏長萬部村より轉任村長となるや克く村政を刷新向上す全年五月落部校に高等科を併置し村民多年の懸案たりし村營電氣事業を計劃し本村文化的施設に空前の成功をなしたり左に之を計劃、現況、將來の三に分ち之を述べんとす

計劃——大正十一年落部村長菅原直治郎氏は前任村長等が陰然目論見又は會社に於て企劃したる事あるも收支の概算に權衡を得難く實現不能なりし電氣事業を村營にて遂行せんと決意し速成奔走中なりしが偶々八雲電氣會社に於て電力に餘裕あるを耳にし機至れりと村有志に諮り事業に就ては遞信省に資源たる村債借入は内務大藏兩省に夫々規定の手續をなし理事者は寢食を忘れて東奔西走の上幾多の困難を排し八方手配をなしたる結果遂に當局の許可を得拓殖銀行より七千圓を資金として借入れ一面基本財産の内七千八百圓を消費し之を一切の設備費に充當して大正十二年九月十五日工事全く成り同日より落部、川向、野田追各部落は電化の惠澤に浴するを得たるが大正十三年に至り字市岡住民の切實なる希望より材料一切の寄附を得起工し部落有志並に青年團員の後援を受け竣工し大正十四年五月より字市岡、黃金澤一帯の住民は點火に接し然も事業の成績頗る良好なり而して本村字茂無部及び之に接續せる森町大字石倉村字ボンナイには電燈の設備なく石倉驛の如きは未だ洋燈を使用しつゝある状態なるより地方住民は電線延長を熱望するも區域の異なる



關係より容易に工事着手し得ざるを遺憾とす

現況——事業収入は點灯戸數二百四十六戸常夜燈室内三百九十一燈屋外四十灯此使用料約五千圓從量灯五十灯使用料約二百圓にして總キロワット數九、四三三燭光七、八六一燭、總線條長三十四間二尺なり、支出を見るに電力料千二百圓維持費五百圓、電球費三百圓、變壓器修繕四百圓、事務費千三百圓、雜費三百圓にして多額の剩餘金を得つゝあり、叙上の如く本事業は適當なる計劃の下に施設せらるゝ本村の固定収入なるを以て事業資金として借入れ、又は消費したる金額の償還方法は十五ヶ年賦なりしも今後十ヶ年賦にて完済し得べき見込充分にして將來一ヶ年の純益莫大に上り住民の負擔を軽減し得べきものとす

將來——將來の計劃を第一、茂無部石倉方面延長第二、入澤方面延長第三、巖野方面延長並に農業工業用電動力供給事業とし之が遂行の曉は優に電氣事業収入を以て一般村費の支出に充當し尙餘力あるべし是れ獨り住民の負擔を軽減するに止まらず農村電化の實現となり漁村の人氣一變し勞力經濟上は勿論工業上將又農業上に及ぼす利益は自他共に甚大なるあり模範村の現實亦架空にあらざるべし

大正十四年四月一日在學兒童と經費の關係より白瀧特別教授場を廢止し六月天理教落部宣教所新設せらる  
現在の行政區劃は十七部にして各部に部長を置き一般施設の補助機關とす落部郵便電信局に落部函館間公衆電話開通の義住氏より請願中の處過般許可せられ寄附金の大半は取纏まりたるを以て近く起工竣成せられ文化的施設に竿頭一步を進むべし現在通學兒童數六百六十四名就學歩合九分九厘にして教育費總額一万三千圓一人當り平均十九圓余なり

大正十三年十二月十三日落部消防組を公設し相木太郎組頭に推され火防設備上の完璧を期し火防組合並に落部火防衛生婦人會之を後援す現在小頭三名消防手三十三名

青年團指導誘掖上落部村青年會の下に落部、川向、茂無部、野田追、巖野の五青年團あり將來村の中堅たるべき青年に質實剛健の氣風を養成に努む就中野田追青年團武團は其施設計劃群を抜き大正十三年優良青年團として本年土木事業効績者として選奨せられ賞狀並に賞金を授與せらる、落部青年團亦健全なる發達を遂

げ大正七年二月十一日紀元節をトし渡島教育會より表彰せらる落部校長三浦嘉七氏赴任するや團長に推され分團組織に變更し以て青年を統一指導し落部村青年會長菅原直治郎氏は銳意青年の智徳を磨き風教の改善に努め公共事業に卒先盡瘁せしむ

處女會亦將來良妻賢母たらしむべく處女の品性を陶冶し公益事業に献身的努力を拂ひつゝあり野田追處女明倫會、落部處女八千代會は殊に其施設、實行事項優良なり落部在郷軍人分會亦公共事業に盡瘁す現在會員百六十五名基本財産三百圓、落部村衛生組合は事務所を字落部に置き悪疫の豫防疫除に全力を傾注し醫治機關として字落部に村醫一名を置く現任村醫は東京慈惠醫院醫學士高橋宏氏なり氏は特に眼科に特殊の技術を有す字野田追に産婆一名現住せり

産業團體には落部村農會あり公法人として健全なる發達の下に施設計劃せられ基礎確實なり落部村漁業組合、川崎船組合は共に漁撈製造の改良發達に全力を傾注し當業者の共濟に最善の努力を拂へり落部村信用組合は有限責任にして大正三年三月落部部落民により組織せられし勤行會發展の化身にして産業並に生計上必要なる資金貸付し以て本村の開發を促しつゝあり大正十四年購買事業を兼營すべく定款變更を總會に諮り可決せり此外に肥料共同購入組合、農事改良實行組合あり、害虫驅除豫防委員二十三名就職せり

大正十四年に於ける村有基本財産は土地二百四十七町步價格三万二千圓山林二十六町步價格二万八千圓建物五百九十六坪價格九千六百圓、有價証券額面一万二千九百圓、預金三千二百圓其他四千圓計八万八千八百圓にして年歳村有林を造成し財産の額年次増加の趨勢にあり

一面生産物を見るに農産物は畑作にして大小豆、大小麥燕麥、裸麥、蕎麥、菜豆、稗、馬齒薯、玉蜀黍、稻黍を主要作物とし年産額十五万圓なり輓近水田を耕作するものあり其成績優良にして大正十四年度に於ける一反步當り豫想一石六斗なるより字入澤に灌漑溝堀鑿を見るため村長菅原直治郎氏不斷の獎勵自覺を促すに怠らず道廳土地改良課にて大正十三年以來導水門溝道水量の基本調査をなしつゝあるより工事起業の要焦眉の間に迫れり而して字市岡、黄金澤一帯の地は徳川農場地なるが農家經濟の疲弊挽回策として造田の速成を



要望する多く現菅原村長は之等の適所に水田起工を鼓吹し居るを以て工事竣工の曉は字入澤に二百町歩市岡黄金澤に二百町歩の黄金花咲く水田地實現すべく一反歩平均一石五斗の收穫とせば六千石を得仮りに戸數五百戸とし一戸五石消費するものとせば二千五百石を要すべく殘三千五百石は移出する事を得るにより本村の開發は之が竣工と共に隔世の感あらしめんか

水産物は鱈、鮭、鱒、蝦、真鱈、烏賊、鯖、海鼠、昆布を主要とし殊に蝦は特産地として知られ大正十四年の烏賊漁は十年以來の大漁なりしが最近大謀網漁業により昔日の漁場殷賑を復活すべく万全を策しつつあり相當の漁獲あるを以て將來漁業の發展疑なく年産額十四万圓なり

本村の農業は畜産混同にあらざれば農家經濟の頽勢を挽回する難く畜産は農業振興上重要なりとす大正七年字野田追齋藤吉之亟落部森岡茂一等大野地方より畜牛十頭を共同購入したり是れ本村畜牛飼養の濫觴とす翌八年野田追、野田悦太郎等卒先して畜牛購入を奨励したるより本業は著るしく發展し大正十二年五月落部畜牛組合成り農家の副業として頭角を現はすに至り現在乳用牛四十三頭乳牛たらんとする者を加ふれば百七十頭に達し搾乳高四百九十九石七千九百八十四圓の多さを算す、馬匹亦改良せられ飼養管理の途大に啓け年末現在三百四十三頭なり而して豚百二十一頭山羊三頭あり家禽は鶏五千百一羽産卵額年一万五千余圓に及ぶ畜産總收入五万余圓

林産物は本村の生命にして産額亦多く運輸交通の途一段啓け檜山郡に至る拓殖道路竣工の曉は尙多額に上るべし今移出材を見るに角材一万八千石、丸太材九百十石、薪材四千五百棚、サギリ六千本其他にして木炭は黒炭窯數二十五、從業戸數二十三、年産額十三万二千四百十貫此林産總價格十五万圓に上る

### ◎北海道山越郡八雲町

位

置 函館港を西北に距る陸路十九里

北緯四十二度二三 東經百四十度二三

大字名稱

大字八雲村、大字山越内村

地勢及廣袤

東北は噴火灣に面し、西南は山脈により爾志、久遠、太櫓、瀬棚の四郡に境し西北は「ロクツ」川により長萬部村に接し東南は野田追川を隔て、茅部郡落部村に隣接せり廣袤三十七方里を有す

沿革の概要

本町は元山越内村と稱したりしか明治十四年七月遊樂部黒岩の二部落を分離して八雲村とし爾來この二ヶ村に一戸長役場を置かれ明治卅五年四月北海道二級町村制實施と共に二ヶ村を通して八雲村と稱し舊村名は大字として存置せらる、明治四十年四月北海道一級町村制を施行し大正八年一月に至り町制を

實施せられ以て現今に及べり、今各大字成立の沿革を釋ぬるに山越内村は寛永年間松前藩主が幕下鎮定の爲め檢察所を設けたる所にして警衛嚴重常に衛士は銃を擬して行人を誰何したりと云ふ當時青森岩手地方の諸縣より來り漁業に従事するもの海濱に沿ふて居住し多くは舊土人を以て部落を形成したるに過ぎざりし以後移民の増加と共に土人は生存上和人との競争に堪へず西北に去る里餘「ユウラップ」川に沿ふ海濱に一小部落を成したるもの即ち遊樂部の始めなりと

八雲村は「ユウラップ」と稱し如上の土人と漁業に従事せる和人とよりなりしか明治十一年徳川慶勝郷其舊臣に授産の策として農業に従事せしめ大樹鬱蒼たる狼吠熊叫の裡に刻苦經營漸次成功の緒に就くを得益々其の範を示すに至るや明治二十九年以後各部落の開拓著しく發達せりと云ふ人口頓に増加し現在戸數二千三百三十四戸人口一万二千三百四十一人を算するに至れり

八雲村名の起原、八雲「やくも」村名は素戔鳴尊の古歌にやくもたつに起因すと云ふ現に市街の内出雲町、八重垣町等の稱あるに徴するも明かなり蓋し尾州熱田神宮の分靈を請ひ日本武命を村社に奉祀せるより出て



























公	私	團	體
町農會	八雲信用購買利用組合	八雲商工組合	八雲改良實行組合
八雲村漁業組合	山越郡畜牛馬畜産組合	鉛川養蚕組合	山越郡畜牛馬畜産組合
八雲村漁業組合	八雲家禽組合	八雲遊樂部川鮭魚蕃殖組合	八雲家禽組合
八雲村漁業組合	八雲家禽組合	八雲遊樂部川鮭魚蕃殖組合	八雲家禽組合
八雲村漁業組合	八雲家禽組合	八雲遊樂部川鮭魚蕃殖組合	八雲家禽組合
八雲村漁業組合	八雲家禽組合	八雲遊樂部川鮭魚蕃殖組合	八雲家禽組合
八雲村漁業組合	八雲家禽組合	八雲遊樂部川鮭魚蕃殖組合	八雲家禽組合
八雲村漁業組合	八雲家禽組合	八雲遊樂部川鮭魚蕃殖組合	八雲家禽組合
八雲村漁業組合	八雲家禽組合	八雲遊樂部川鮭魚蕃殖組合	八雲家禽組合
八雲村漁業組合	八雲家禽組合	八雲遊樂部川鮭魚蕃殖組合	八雲家禽組合

會社銀行及工場

名	稱	創立年月	名	稱	創立年月
函館水電會社	八雲營業所	大正十二年四月	大田商事	合資會社	大正十三年二月
北海道銀行	八雲出張所	大正十二年二月	長江商事	合資會社	大正十四年一月
合資會社	大場礦業所	大正十三年八月	八雲	新報社	大正十三年七月
合資會社	高地商店	大正十三年三月			
北海道煉乳株式會社	八雲工場		煉乳、牛酪、乳糖、カゼイン		

工場	種類	動力	製品
八雲製材所	蒸氣機關	力	建築用材、函板等
渡邊製材所	水	力	下駄材、下駄棒、セメン樽等
藤田製材所	電	力	建築用材、函板等
川口藥化學工場	電	力	藥品製造
熱田製飴工場	電	力	澱粉飴

農場及牧場

名稱	位置	田畑	牧場	山林	未墾地	其他	合計	小作數
德川農場	大字八雲內村	一、三三六	七五	二、二七五	一、〇六九	二	四、七六一	一九三
石川農場	大字山越內村	二八五	一〇六	三九〇	四四	一七	八五二	四七
鈴木農場	同	三三七	一〇九	七六五			一、二五三	七
大橋農場	大字山越內村	二八〇	四一八	二四三			六三三	三〇
岡田農場	大字山越內村	一〇八	五七〇	一六五			一、六六九	三七
竹內農場	大字山越內村	九〇	一六五	九五			三三三	四
宮村農場	同	二〇	一六五	九五			三三三	四
新關農場	同	九五	一〇〇	三三三			五五八	八
若松農場	大字八雲村	三七	一三	三七三			七二二	一八
葵農場	同	三	一三	三三三			五五八	八
合計		一、三三六	七五	二、二七五	一、〇六九	二	四、七六一	一九三



# 露光量違いの為重複撮影

大字八雲村字ビリカベツに温泉一ヶ所あり

## 表

## 彰

忠實格勤村長ニ歴任スルコト茲ニ三十三年克ク地方制度ノ主旨ヲ体シテ自治ノ發達ヲ圖リ村政ヲ整理シ勤儉貯蓄及産業獎勵教育ノ普及等ニ努メ其効績少カラス仍テ本會表彰規程第二條ニ依リ目錄ノ通贈呈シ茲ニ之ヲ表彰ス

大正六年三月二十日

渡島教育會長從五位勳四等

河毛三郎

大正三年以降功勞者或ハ善行者トシテ八雲村長ヨリ表彰セラレタル氏名左ノ如シ

山越内村	篠崎由藏	八雲村	内田文三郎	八雲村	大島鍛	八雲村	八尾吉之助
八雲村	川口良昌	全	松本コト子	全	藤坂リエ子	全	森富崇
全	榊原ウラ	全	平野幸三郎	全	佐久間省一	全	梅村多十郎
全	小川助次郎	山越内村	水野市兵衛	全	河合鍋吉	八雲村	中島末吉
全	岡野隆麿	全	樋口惣助	全	八木福太郎	全	石川錦一郎
山越内村	水野照三郎						
一、八雲町會議員							
林常則	佐久間省一	大島鍛	八尾吉之助	河合鍋吉	岡部五郎		
平野幸三郎	竹内辰次郎	鈴木永吉	長江時三郎	小川乙藏	水野市兵衛		
岡島新八	小川助次郎	中島末吉	梅村多十郎	渡邊駒治	幡野直次		
澗山龜三郎							

八雲町  
徳川農場  
電話八番

サツボロミルク  
クマ印ミルク  
クマ印ハタ  
製造元  
八雲工場  
電話四五〇番

野田追出張所  
大關出張所  
森出張所  
本郷出張所  
七飯出張所

山越郡八雲町野田追出張所  
山越郡八雲町大關出張所  
山越郡森町森出張所  
山越郡大野村本郷出張所  
山越郡七飯村七飯出張所







北海道山越郡長萬部村

旅館

三武田勇吉

函館本線八雲町

電話 一七番

八雲驛より三丁市街の中央

有限責任

八雲信用購買利用組合

電話 四三番

八雲驛本町

大島齒科醫院

電話 六番

位置

函館驛を距る六十九哩九  
北緯四十二度、東經百四十度  
長萬部驛より

大字名稱

本村には大字名稱なし

地勢及廣表

東は噴火湖に臨み海に沿ひて虻田郡遊邊村に境し西は瀬棚郡と合合しし長萬部瀬棚諸山の中央  
ピツカベツ、稻穂峠を以て界とし

南は山越郡八雲村宇黒岩との間ラック川を以て境とし北は稻穂峠の道を以て吉都郡黒松内村との間を以て  
す

西北には後志山麓の南端再起して連里し一二に高峰多く全面積の約百分の七十五は高嶺なり  
廣 表 東西七里十七丁、南北六里三十丁、面積二十 方里一六

沿革の大要 本村は寛文九年松前家字訓達に於て最長官長と稱ひ之を半け附永松前家の領となる、安永二年  
（今より百五十年前）松前家始めて此の地に家を建てて番屋と稱へ茲に支配人を派し主人を使役して旅  
人の宿泊に使ならしむ、當時本村は各所往復の要所なり同年十二月會所を設置し以て文化の始め龜田關門  
を此處に移し華夷の限界とす、安政四年山越郡府並小一郡を監督となし農夫百五人を率て來り字紋別  
、粟本岱、二股、靜狩の各所に分配し、開拓をなさしめた。同六年十一月南部領となり坊主山山麓に陣屋  
を建設し物頭久慈三藏をして噴火灣警備の任に當らしむ、其後南郡、津輕の兩地より陸續移住し元治元年  
函館奉行小出大和守出張し村並に列せられ長萬部村と稱すへきを命す、明治三年斗南郡領地となりたるこ  
とあるも翌四年之が支配を廢せられ明治五年八月函館支廳長萬部出張所を置かる同七年一月長萬部五等郵  
便局を創設せられ同年十一月戸長役場及長萬部小學校を、同十七年長萬部警察分署を設置せられ同三十六  
年十一月北銀開通し爾來各地より移民増加して漸次開發し明治三十九年四月一日二級町村制を施行せられ



◎ 北海道山越郡長萬部村

位置

函館驛を距る六十九哩九「長萬部驛より」

北緯四十二度、東經百四十度

大字名稱 本村には大字名稱なし

地勢及廣袤 東は噴火灣に臨み海に沿ひて虻田郡辨邊村に境し西は瀬棚郡と脊合して長萬部瀬棚諸山の中央ピリカベツ、稻穂峠を以て界とし

南は山越郡八雲村字黒岩との間ロクッ川を以て境とし北は稻穂峠の麓を以て壽都郡黒松内村との間を以てす

廣袤 西北には後志山麓の南端再起して連坦し一般に高峰多く全面積の約百分の七十五は高地なり  
東西七里十七丁、南北六里三十四丁、面積二十一方里一六

沿革の大要 本村は寛文九年松前家字訓縫に於て蝦夷酋長と戦ひ之を平け爾來松前家の領となる、安永二年（今より百五十余年前）松前家始めて此の地に家を建て是を番屋と稱へ茲に支配人を派し土人を使役して旅人の宿泊に便ならしむ、當時本村は各所往復の要所たり同年十二月會所を設置し以て文化の始め龜田關門を此處に移し華夷の限界とす、安政四年徳川幕府荒井小一郎を監督となし農夫百五人を率ゐて來り字紋別、栗木岱、二股、靜狩の各所に分配して開拓をなさしめたり同六年十一月南部領となり坊主山山麓に陣屋を建設し物頭久慈三藏をして噴火灣警備の任に當らしむ、其後南部、津輕の兩地より陸續移住し元治元年函館奉行小出大和守出張し村並に列せられ長萬部村と稱すへきを命す、明治三年斗南藩領地となりたることあるも翌四年之か支配を廢せられ明治五年八月函館支廳長萬部出張所を置かる同七年一月長萬部五等郵便局を創設せられ同年十一月戸長役場及長萬部小學校を、同十七年長萬部警察分署を設置せられ同三十六年十一月北鐵開通し爾來各地より移民増加して漸次開發し明治三十九年四月一日二級町村制を施行せられ

旅館 三武田勇吉

函館本線八雲町

電話一七番

八雲驛より三丁市街の中央

有限責任

八雲信用購買利用組合

電話四三番

八雲本町

大島齒科醫院

電話六番



大正七年七月十日村界變更により虻田郡辨邊村字靜狩を本村に編入せらる、同十二年四月一日一級町村制を施行せられ今日に至る

氣象

東西北の三面は透らすに重疊なる山岳を以てせり加ふるに冬期は西及西北風多く春夏秋には東及東南風多し随つて雨量も亦多く秋季に入りては一日に晴曇雨の變化數回に及ぶこと少しとせず  
降雪の量も亦多く例年五尺より七尺に及ぶを常とす  
降雪の期は平年十月二十日前後にして融雪の期は四月下旬なり寒氣激しからざるも五月中旬尙結氷を見ることあり

海岸地方は比較的雨量少なく冬期降雪の量も普通三四尺に過ぎず、夏季は東風(俗にヤマセと稱す)多きため往々農作物を害することあり

氣 溫 最高 二六度 最低 〇、九度 平均 七、二度  
風 向 東八、南東七六、南一三二、南西七、西一二九、西北四、北九  
天氣日數 晴一八八、曇一二九、雨三五、雪三七  
霜 初霜十月十四日、晚霜五月十四日

土地及戸口 (大正十三年)

官公有地の調査を欠く

無租地	有租地	無租地	有租地
民有地			

田畑山林		牧場		原野		計	
一、二八三	反	九四五六		九六七五		二、三〇二四	
七四		一、七二四六		三、二七三九		一、一五四九	
川成地		宅地		雜種地		計	
五、四四	反	一、二二四		一九		四、五九四七	
二七九		八〇		六、七九五			

産業 (大正十三年)

農家		農	
自作	自作兼小作	小作	計
二、三三九	八五	一九四	五、一八
三、八四	副業	計	
一、三三四			
五、一八			











衛生 (十三年)

醫師	二	產婆	四	衛生組合	二	隔離病舎	一
傳染病患者	病名	發生	死亡	全	治		
腸チブス	十二年	二〇	十二年	三	十二年	一七	
チフテリア	十二年	三	十二年	一	十二年	二一	
瘧疾	十二年	一	十二年	一	十二年	二一	

交通

鐵道 函館本線、長輪線  
 函館へ (長萬部驛より) 六十九哩九分  
 小樽へ (全 上) 八十八哩二分  
 停車場、五、訓練、中の澤、長萬部、二股、靜狩  
 長萬部は長輪鐵道の分岐点にして、大正八年起工靜狩、長萬部間の六哩三分は大正九年竣工し大正十二年より業務開始せり、訓練は大正十五年に起工せらるへき瀬棚鐵道の分岐点となるべき所にして之か竣工の曉には交通上に裨益する所多大なるべし

道路	八里二十丁	九里廿九丁	五間	廿七里六丁	橋	梁	國道	準地方費道	村道	
							一一		六	二

諸車 乗用馬車 三 自轉車 一四 荷積馬車 一一五 自動車 二 人力車 一 荷車 七

財政及負擔

郵便局。長萬部郵便局は字長萬部、訓練郵便局は字訓練にあり近く特設電話の架設を見るへしと云ふ

國稅	地方稅	地稅	方稅	稅	科	目	負擔額	摘要	
地稅	營業稅	雜稅	反稅	漁稅	營業稅	所得稅	戶計	二、四六〇 八七五 一、一三一 一、七六一 一五一 五四九 四三	二、四六〇 八七五 一、一三一 一、七六一 一五一 五四九 四三
地稅	營業稅	雜稅	反稅	漁稅	營業稅	所得稅	戶計	二、四六〇 八七五 一、一三一 一、七六一 一五一 五四九 四三	二、四六〇 八七五 一、一三一 一、七六一 一五一 五四九 四三
地稅	營業稅	雜稅	反稅	漁稅	營業稅	所得稅	戶計	二、四六〇 八七五 一、一三一 一、七六一 一五一 五四九 四三	二、四六〇 八七五 一、一三一 一、七六一 一五一 五四九 四三



村		特別税反別割		戸別割		所得割		営業割	
三二、二一九	一人當	四圓四十二錢	二拾貳圓參錢七厘	四四、二三二	一、七五〇	四五、九八二	四五、九八二	四五、九八二	四五、九八二

官公衛

名	稱	位	置	名	稱	位	置
長萬部村役場	長萬部村字長萬部	同	上	訓練	訓練	同	上
長萬部種馬所	長萬部村字長萬部	同	上	訓練	訓練	同	上
長萬部郵便局	長萬部村字長萬部	同	上	訓練	訓練	同	上
長萬部郵便局	長萬部村字長萬部	同	上	訓練	訓練	同	上
長萬部郵便局	長萬部村字長萬部	同	上	訓練	訓練	同	上
長萬部郵便局	長萬部村字長萬部	同	上	訓練	訓練	同	上
長萬部郵便局	長萬部村字長萬部	同	上	訓練	訓練	同	上
長萬部郵便局	長萬部村字長萬部	同	上	訓練	訓練	同	上
長萬部郵便局	長萬部村字長萬部	同	上	訓練	訓練	同	上
長萬部郵便局	長萬部村字長萬部	同	上	訓練	訓練	同	上

會社及産業組合

株式會社	名稱	所在地	營業種類	資本額	出資總額	拂込額	積立金	設立年月日
川崎造船所	川崎造船所	靜狩	金鑛採掘製煉	一、九七〇	五、九九五	五、九一〇	二、六五	大正六年七月五日
星製藥山	星製藥山	長萬部	賣藥	一、四六八	五、九九五	五、九一〇	二、六五	大正六年七月五日
北海林工株式會社	北海林工株式會社	字中の澤	澱粉	一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇	大正十三年三月六日
北海道製粉株式會社	北海道製粉株式會社	字中の澤	澱粉	一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇	大正十三年三月六日
有限長萬部信用組合	有限長萬部信用組合	及人員		一、四六八	五、九九五	五、九一〇	二、六五	大正六年七月五日
有限訓練購買販賣組合	有限訓練購買販賣組合	及人員		一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇	大正十三年三月六日

川崎造船所靜狩鑛山、靜狩停車場より西十五丁にあり將來益有望なる金鑛なりと傳へられ大正十二年より同所の經營に屬せしか本鑛山は大正九年頃石川縣人木山與市の發見にして爾來同人の經營中川崎造船所に於て讓受けたるものなりと云ふ

溫泉

嵯峨溫泉は鹽泉にして長萬部村字二股の西長萬部川の上流にあり二股より約二里半ピリカ別溫泉一名福の溫泉は紋別より三里六丁の山奥にあり

- 村會議員 畑中富藏 坂東新助 吉田常三郎 矢野榮太郎 木下勘藏  
 吉岡角太 佐藤雄三郎 新田榮右衛門 眞神吾平 山崎友藏



祝刊行

日野恭三郎

山越郡長萬部村

部落部長

合田庄太郎	林政次郎	淺村鐵平	加藤鹿藏	佐藤賢司	山本紋平
茂訓縫部長	前島彌市	六津部長	田中末松	訓縫部長	廣澤村治
萱野部長	野地久藏	中の澤部長	加藤重次郎	紋別部長	加藤弘毅
長萬部部長	村田富太郎	學林部長	山本庫太郎	追込部長	菊地三太郎
牧定内部部長	三原藤藏	栗木岱部長	石黒彦三郎	土津田部長	東山森平
二股部長	佐藤雄三郎	知來部長	丹野權兵衛	巖岱部長	伊藤竹次郎
静狩部長	因幡喜作				







露光量違いの為重複撮影

所扱取 車動自馬 期定行柵瀬 函館本線國縫驛前 鐵道局指定旅館  <b>大</b> <b>大嶋屋旅館</b> 電話(オシマ)又ハ(オ)	函館本線國縫驛前 旅館 御待合 <b>加</b> <b>藤田屋</b> 瀬棚國縫定期 馬車、自動車差立所
乗合自動車は毎日午前午後の二回發着	函館本線國縫驛前 蹄鐵工場  <b>谷</b> <b>三谷才次郎</b>

◎北海道茅部郡砂原村  
面積及戸口

面積	積	沿	線	現	住	戸	數	男	女	計
三、七六	方	里					四六二	一、五七三	一、四三八	三、〇一一

人口動態	婚	別	離	婚	出	生	死	産	死	亡	出	産	死	對	増
	六	一				一	六	二	一	二	八	三	七	九	

教育	學	齡	見	童	校	數	學	級	見	童	數	總	數	就	學	者	不	就	學	者	計	高	等	高	等	計
	六	一	四	五	三	二	二	九	四	九	七	五	一	七												

財政	財	政	政	政	政	政	政	政	政	政	政	政	政	政	政	政	政	政	政	政	政	政	政	政	政	政	政
	一	一	九	一	四	三	三	七	一	七	三	三	七	三	七	一	六	六	六	六	五	七	一				



瀨 棚 行 定 期 自 動 車 取 扱 所

函館本線國縫驛前  
鐵道局指定旅館

**大 嶋 屋 旅 館**

電話(オシマ)又ハ(オ)

(集合自動車は毎日午前午後の二回發着)

---

五ノ二

函館本線國縫驛前

**加 藤 田 屋**

御待合  
瀨棚國縫定期  
馬車、自動車差立所

函館本線國縫驛前  
蹄鐵工場

**谷 三 谷 才 次 郎**

◎ 北海道茅部郡砂原村  
面積及戸口

面積	積	沿岸線	現住戸數	男	女	計
三、七六	方里	五、〇一	四六二	一、五七三	一、四三八	三、〇一一

人口動態

婚姻	離	婚	出	生	死	産	死	亡	死亡ニ對シ 出產ノ増
六一	三	一六二	一二	八三	七九				

教育

學齡兒童	校	尋	尋	特	計	尋	高	計	尋	高	計
六二四	五三二	二	一	一	二	九	一	一	四九七	二〇	五二七

財政

町村稅	其他收入	總額	一戸當り	經常	常費	臨時	出費
一二、九一〇	四、三三七	一七、二三七	三七	一六、六六六	五七一		























一名物 (鯖魚の製造品)

(イ) 干鯖魚 又そぎ鯖魚とも云ふ

そぎ鯖は生鯖魚を一度ゆであげ、これを二分程の厚さにそぎ日光又は温室にて干しあげたるものにして明治四十五年頃より販路を開きたるものなり、今や名を博し販路益多し

(ロ) 酢鯖魚

酢鯖魚はそぎ鯖魚と同じく一度ゆであげ之を酢に漬け樽詰となしたるものにて干鯖魚に次ぎ販路多し

特産物

鹿部海岸を距る約一里乃至一里半折戸川上流の北方に於て石材産出地あり、建築材其他石碑佛像用材に適し之が需用を充たすに至らば鹿部の特産物として地方を益するに至るへし

村會議員 盛田政一、古村石藏、鈴木和助、木村梅太郎、伊藤源吉、中川忠太郎 (二名欠員中)  
 部落部長 伊藤源吉、川村太次郎、盛田政一、星留五郎、梅本鐵藏  
 鹿部信用組合長 伊藤源八

茅部那鹿部村字龜泊

旅館 舎工藤キサ

鹿部 自動車待合 午前二回  
 午後一回  
 大沼 乗合馬車發着 午前二回  
 午後一回  
 不定時一回

熊泊、白尻方面乗馬御案内

茅部那鹿部村字鹿部二十四番地

司法代書人

高橋貞助

茅部那鹿部村字龜泊二十七番地

醫師 相澤良恂

温泉 新湯



一名物 (鯖魚の製造品)

(イ) 干鯖魚 又そぎ鯖魚とも云ふ

そぎ鯖は生鯖魚を一度ゆであせ、これを二分程の厚さにそぎ日光又は温室にて干しあげたるものにして明治四十五年頃より販路を開きたるものなり、今や名を博し販路益多し

(ロ) 煎鯖魚

酢鯖魚はそぎ鯖魚と同じく一度ゆであげ之を煎に漬けて干しあぐるものにて干鯖魚に次ぎ販路多し  
特産物

鹿部海岸を距る約一里乃至一甲半折戸川と流の北方に於て石材産出地あり、建築材其他石碑佛像用材に適し之が需用を充たすに至るは鹿部の特産物として地方を益するに至るへし

村 會 員 盛田政一、吉村石次、鈴木和助、木村梅太郎、伊藤源吉、中川忠太郎 (二名欠員中)  
部 落 部 長 伊藤源吉、川村大次郎、盛田政一、早留五郎、梅本鐵藏  
鹿部信用組合長 伊藤源八

茅部郡鹿部村字龜泊

旅館 舎工藤キサ

鹿部 自動車待合 午前二回  
大沼 間 乗合馬車發着 午後一回  
不定時一回

熊泊、白尻方面乗馬御案内

茅部郡鹿部村字鹿部二十四番地

司法代書人

高橋貞助

茅部郡鹿部村字龜泊二十七番地

醫師 相澤良恂

温泉 新湯



大沼驛より四里自動車の便あり  
此の間僅四十分

茅部郡鹿部村字龜泊

### 鹿の湯 鹿島館

伊藤こと

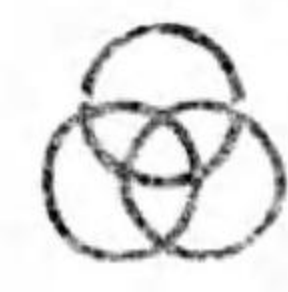
特効

一般營養不良症、諸種の皮膚病、慢性消化器病  
急性慢性癩麻質斯、婦人科諸病

### 温泉旅館

渡島國茅部郡鹿部村

海産鮮魚  
米穀雜貨商  
荒物小間物



修理良藏

電話(ミツワ)又ハ(ミ)  
振替小樽 一〇五三〇番

薪炭  
雜貨  
荒物

商

正 高橋庄吉

渡島國茅部郡鹿部村

### 温泉旅館

渡島國茅部郡鹿部村字龜泊二十五番地

鶴の湯

### 陸奥館

細越

間歇温泉攝氏百度

分拆成績に依る醫治効用

▲腺病、貧血諸症 ▲月經不順、白帶下慢性子宮  
疾患 ▲慢性關節並筋肉癱麻質斯 ▲慢性胃腸加答  
兒 ▲重症恢復期 ▲慢性滲出性疾患 ▲痒疹其他皮  
膚病 ▲稀釋飲用するときは常習性便秘に効あり

渡島國茅部郡鹿部村字龜泊

牛馬商 阿部平四郎

即席 御料理 梅乃家

千成



雜貨  
物商

△盛田政一

渡島國茅部郡鹿部村字常路

烏御料理

松乃家

愛子

渡島國茅部郡鹿部村字龜泊

吳服太物  
雜貨荒物  
度量衡  
商

太川村太次郎

渡島國茅部郡鹿部村字鹿部

海產物  
雜貨荒物  
商

甚川村甚吉

渡島國茅部郡鹿部村字高森

吳服太物  
雜貨荒物  
商

松川村マツ

渡島國茅部郡鹿部村字本別